統計行事

市町村

—(八　月)—

(表名)　(報告期限)

綿織物産額調(特定町村)三　日
絹織物及絹綿交織物産額調(同)　五　日
人口動態調査票　五　日
園藝農産物　果實ノ二　十五日
水稲作況　十八日
製　藍　末　日
學事年報乙欵及諸表　末　日

—(九　月)—

綿織物産額調(特定町村)三　日
絹織物及絹綿交織物産額調(同)　五　日
人口動態調査票　五　日
夏秋蠶豫想掃立數量　五　日
園藝農産物蔬菜及花卉ノ一十五日
米第一回豫想收穫高　廿三日
米作農家戸數調　廿三日
園藝農産物果實ノ三　末　日
製　茶　末　日
夏秋蠶豫想收繭高　末　日

統計調査員

—(八　月)—

果　實　中
ネーブルオレンヂ、ナツミカン
其ノ他ノ柑橘類　三　日
ウメ、モモ、オウトウ、ビワ　十　日
夏秋蠶豫想掃立數量　末　日

—(九　月)—

夏季調査作物集計報告　十　日
水、陸稻、粳米、糯米、反別、
米作農家戸數　十　日
夏秋蠶豫想收繭高　廿五日

盛夏の調べ

茨城統計(七月號目次)

◎表紙……大貫海岸海水浴場
◎口繪……麥作柄調査中の統計調査員…笠間町統計調査員…松原町統計調査員…茨城縣統計協會縣外視察團グラフ

巻頭言……【一】
耕地統計論……農林省統計官　長畑健二…【二】
地方統計課長會議……【八】
工場統計より觀た我國工業の趨勢(上)……商工省統計官川澄巳知雄…【六】
杉博士の事蹟……横山雅雄【一】
内閣統計講習生……【一五】

統計模範町村訪問記
猿島郡神大實村へ……【一六】
久慈郡小里村へ……【二】

統計事務講習會……【二】
統計思想普及映畫會……【二七】
實務道場統計調査の栞……【一八】
寄贈圖書……【三〇・四三】

最近の統計
春蠶豫想收繭高……【三一】
麥豫想收穫高……【三二】
林野産物昨年の總産額……【三四】

資源概況速報……【三六】
茨城縣統計協會縣外視察紀行……【三七】
統計相談所……【四四】
各地統計雜信……【四五】
鐵鋼に關する調査……【四八】
統計主任者異動……【四八】
統計調査員異動……【四八】

文苑
短歌……丹四郎選……【五】
俳句……前田猶春選……【五】
川柳……山中紺郎選……【五三】

編輯後記……【五四】

茨城統計　七月號

巻頭言

×

盛夏だ、眞夏だ、灼熱鐵も熔かさん酷暑の候である。併し酷暑が何だ、盛夏が何だ、恐るゝに足りぬ。心頭滅却すれば火も亦涼しい。

×

怯ゆるものは乘ぜられ、倒れるものは打たれる。生々育々の夏を利して戰ひ、秋涼の豊穣を樂しむ爲に努めやうではないか。

×

統計模範縣として全國に誇る千葉縣が我が茨城統計の躍進を推稱し、川崎課長の信念と熱意を稱揚して止まず。我等協心戮力して緊褌一番、省みて恥ずるなきを期すべきである。

×

理解を以つて指導に當られし縣統計協會長山本秋廣氏突如として本縣を去る。惜しみても余りあり。

長畑統計官

耕地統計論【5】

農林省統計官　長畑健二

第七節　耕地統計の時の問題

(一)靜態調査

耕地なる大量は人口大量などに比較すれば極めて其の移動の緩漫なものであつて、山林が一瞬にして耕地となることもなければ、耕地が一瞬にして宅地と化すると云ふ樣なことも稀であるからして、一定の時點を押へて嚴密な靜態調査を行ふことの必要性が人口等に比較して少い樣に常識的には思はれぬでもないが、靜態調査としては、やはり人口等の場合と等しく時間點なる瞬間を押へて耕地大量を觀察せねばならぬ。而して時期としては一年の中何時でなければならぬといふ特別の理由はない。唯調査上可成便利のいゝ時期を選定すべきである。

農林省統計に於ては、毎年末を以て調査時期として居る。年末現在と云ふ時は暦年の終りであり、同時に次の暦年の初めでもある譯であるから、單に利用者の立場から云へば割に便利であらう。

併し、統計調査として實地に耕地を觀察する者の立場、即ち調査員の身になつて見れば決して調査に都合のよい時期ではない。

第一に年末、年始は總ての者に取つて、決して調査などに從事して居ることの出來ない時期である。官公吏初めの勤人は此の日は休暇であるのに、調査員のみ調査に從事するなどゝ云ふことは、言ふべくして行はるゝものではない。

第二に、假りに調査員が調査活動をなすにしても、北國の降雪地帶に於ては耕地は一面雪に覆はれて居る場合が多く、實地觀測上不便が多い。よしんば雪に覆はれないにしても年末年始頃は耕地に作物の最も少い時期であつて耕地なりや否やを判斷するに其の基礎をなす作物が栽培されて居らぬ爲に不便を蒙ることも多い。

靜大量の調査の時期としては、一般に其の大量が比較的ノルマルな狀態に在る時を選定すべきは勿論の事である。耕地大量は前述せる樣に、人口大量などゝ異つて、變動の比較的緩漫なものであるから、特に或る時期の調査がノルマルを缺くと云ふ樣な事は考へられないが、それでも一年の內には耕地の增減の比較的多い時期と、少い時期とがあるであらう。

冬期の農閑期を利用して農家が小開墾をなす事は農林省などでも奬勵してゐる樣であるから、冬期には新らしい耕地が增加する場合があるであらう。又北海道などの寒國に於ては、冬の積雪期に伐木を行ひ、春の融雪期に於て之を開墾して耕地となし播種を行ふといふ樣な事も行はるゝ場合があらうから、春季も調査時期としては感心しない。耕地に最も作物の多い夏期或は秋期は此の點に於て調査の好時期と謂へる。唯此の時期は調査員たるべき農家に取つても多忙な時であるから、此の點に於て多少の不便はある。又眞夏の暑い盛りも調査事務の能率上不便であるとしなければならない。

結局昭和四年の耕地調査の樣に、九月一日と云ふ時などは比較的無難な時であらう。

靜大量の決定は之を時間點、即ち或る瞬間に於てなすべきであるから、耕地大量に就ても之を決定して置く必要がある。人口の樣に耕地は晝と夜との間に其の分布に差異を生ずるものでないから、耕地大量に就ても之を決定して置く必要がある。人口の樣に耕地は晝と夜との間に其の分布に差異を生ずるものでないから、實際上はそれ程嚴

密に規定する必要はないと思ふが、水害などによつて一瞬にして耕地の流失を見る樣なことが起る場合には、調査の時間點をも嚴格に規定して置く必要があらうと思ふ。

調査上の觀察は、普通調査の時間點以後に於て、一定の期間を以て特定人によつてなさるゝものであつて、之を豫め其の調査時期以前に行ふことは將來の豫測をなす事であつて、理論上面白くない。從つて調査の時間點は、調査日の始點を以てするを普通とする。即ち一日現在の調査ならば一日の午前零時を以て調査の時間點とするが如きである。併し農林省統計に於ては年末現在又は何月末日現在とある場合は十二月三十一日午後十二時、何月末日午後十二時と云ふ樣に最終時刻を指すことゝしてゐるが、之は次の日、即ち十二月末日ならば次の年の一月一日、三月末日ならば四月一日を採れば、其の日の午前零時と一致することゝなる譯であつて、趣旨としては何れも同じことになる。

農林統計の耕地面積は十二月末日となつてゐるから、嚴格に謂へば十二月三十一日午後十二時現在の調査と謂ふことになる。

(二)年內移動の調査時期

動大量は其の存在が時點的なものであり、其の大量を構成する單位の存在が瞬間的であるものを云ふ譯であるから、之を補捉するには其の單位の存在する瞬間に於て之を補捉せねばならぬこと當然である。勿論別に其の單位の存在の瞬間又は日時並に調査に必要なる事項を記入せる記錄が、統計上の目的以外の爲に作成し置かれる場合に於ては、勝手な時期に於て統計上の事實觀察を其の記錄に據つて行ふことも可能ではあるが、第一義統計調査に於ては單位の存在の瞬間に之を觀察せねばならぬ道理である。

此の趣旨を以てすれば耕地の移動は、其の移動の瞬間に於て之を補捉せねばならぬことゝなる。然るに耕地が耕地に非ざる土地となり、耕地に非ざる土地が耕地となることは、水害等の特殊の場合を除いては文字通り瞬間的に事件が發生する性質のものではない。寧ろ極めて除々に耕地が拓かれ又耕地が潰される場合が多い。

耕地の開墾が行はるゝにしても、之に着手してから耕地の外觀を呈するに至る迄は、相當の日子を費やさねばならぬ。斯の樣に事件の發生が極めて緩漫なる場合、換言すれば發生が瞬間的に非ずして一定の時間延長を持つ場合に於ては、何時を以て其の事件の發生と見るかに困難を感ずることが相當多いと思はれる。

地方統計課長會議

內閣統計局では五月十一、十二の兩日同局內に於て地方統計課長會議を開催、本縣よりは川崎統計課長及び成瀨屬が出席した。議題は一、人口動態調査の整備方法に關する諸問事項、一、生計費指數資料實地調査に關する指示事項、一、昭和十五年國勢調査の計畫準備に關する指示事項、一、家計調査に關する注意事項、一、一般事務注意事項で會議第一日には大橋內閣書記官長より左の如き訓示があつた。

我國現下の時局は、內外寇に容易ならざるものがありまして、此の間に處し、國運の伸張を期する爲には、各般の政策施設に亘り、更新を心要とするものが極めて多いのであります。政府に於きましては、全力を傾倒して、其の實現に努力致して居るのでありますが、此等の計畫立案に當りましては、其の基礎を各種の統計に置かねばならぬのでありまして正確にして廣汎なる統計の心要の一層切實なるものがあります。近時統計の刷新整備に關し、相當見るべきものがありますが、現下の重要性に鑑み、諸君の一層の精勵を切望して已まぬ次第であります。

扨て、今回會議の主題に致してありまする人口動態調査並に生計費指數調査は、共に極めて重要の調査であります。人口動態統計は人口問題の研究並に對策に必要缺くべからざるものでありますると共に、近時頓に其の重要性を强調せられて參りました國民保健施設の最も普遍的且つ基礎的の資料でありますので、當局に於きましては昨年より鋭意之が改善整備方法に關して種々講究致しつゝあるのであります。此の點に關し各位の抱懷する意見を開陳せられたいと存じます。又生計費指數の調査は國民生活の安定を圖るべき諸般の施設に其の據るべき基準を提供するものでありまして、現在の經濟事情社會事情等に鑑み、正確にして權威ある此の種の調査を急速に實施することの必要を認め、過日本調査實施の爲に勅令閣令等の法令の制定を見、愈々今年七月以降實施致すことに相成りましたのであります。而して本調査の結果は、最も的確でありますると共に最も敏速に公表することを要するのでありまして、諸君の周到なる配意に依り、此等の點に關し萬遺憾なきを期したいと存じます。

尙其の他諸般の事項に付きまして、種々當局より指示もあることでありますから、其の意の存する所を了得せらるゝと共に愼重協議を盡されまして十分本會議の效果を收められんことを希望致します。

工場統計より觀た我國工業の趨勢【上】

商工省統計官　川崎巳知雄

我國の工業が不斷の躍進を續け、其の生産活動が年を追ふて活潑になりつゝあることは、邦家の爲洵に慶賀に堪へない所であるが、此の趨勢は最近概數を得た昭和十年の工場統計にも如實に現れて居る。商工省に於ては資源調査法に基き工場調査規則を制定し、從來之に依つて毎年全國の「五人以上の職工を使用する設備を有し又は常時五人以上の職工を使用する工場」に付其の生産及設備に關する調査を施行し、其の結果を毎年一回工場統計表として表して居るのであるが、今此の工場調査に依る數字に基き我國の工業が輓近如何なる過程を辿つて來たか、そして昭和十年には如何なる現狀に在るのであるかを略述することゝしよう。

(一)工場數　昭和十年の工場總數は八五、一七四に達した。翻つて我國に於ける工場數累增の經過を通觀するに、大正三年には三一、七一七を示したに過ぎないものが、歐洲大戰直後の大正八年には戰時の好況を反映して四三、九四九に及び、其の後も引續き增加の傾向を辿つて昭和五年には六二、二三四となり、大正三年の工場數の殆ど二倍に達するの勢を示した。尙其の後も漸增の一途を辿つたのであるが、昭和八年に至り軍需工業の勃興竝に其の他の好條件に刺戟されて工業は益々隆盛となり、其の結果工場數も七一、九四〇に達し、翌九年も引續き增加して八〇、三一一となつた。(左表參照)

年次	工場數	年次	工場數
大正三年	三一、七一七	昭和五年	六二、二三四
大正八年	四三、九四九	昭和六年	六四、四三六
大正十一年	四六、四二七	昭和七年	六七、三一八
大正十三年	四八、三九四	昭和八年	七一、九四〇
昭和元年	五一、九〇六	昭和九年	八〇、三一一
昭和三年	五五、九四八	昭和十年	八五、一七四

今昭和十年の工場數を工業別及主なる府縣別に表示すると次の樣になる。

(1) 工業別工場數

紡織工業	二五、五六二	印刷及製本業	三、三五八
金屬工業	七、三一八	食料品工業	一三、六八四
機械器具工業	一〇、三五二	「ガス」及電氣業	五四九
窯業	三、八九六	其ノ他ノ工業	八、五四四
化學工業	四、六四四	計	八五、一七四
製材及木製品工業	七、二六七		

(2) 道府縣別工場數

東京	一三、一一六	靜岡	二、九八三
大阪	一二、五九一	福井	二、五五七
愛知	九、一三七	北海道	二、四六七
兵庫	四、二八〇	廣島	二、〇五六
京都	三、三四三	新潟	一、九九五

(二)職工數 昭和十年末現在に於ける職工總數は二、三六九、二七七人であつて、其の內男工は一、二八七、五七五人、女工は一、〇八一、七〇二人である。職工數に付過去に於ける其の增減の傾向を見るに、大正三年には九四八、二六五人を示したに過ぎないものが、大正八年には一、五二〇、四六六人に增加し、大正十三年頃より昭和四年頃迄は大体百八十萬人乃至百九十萬人を上下して居たが、昭和五、六年頃の不況時代には約百六十萬人臺に減少した。然し乍ら其の後工業界の活況に伴ひ、新設工場の增加或は工場に於ける職工の增員に依り、昭和八年には約百九十萬人に達し、翌九年には二百萬人を突破し、更に昭和十年に至つて二百三十七萬人にも及ぶ躍進振りを示したのである。今昭和十年末現在に於ける職工數を工業別及主なる府縣別に表示すると次の樣になる。

(1) 工業別職工數

紡織工業	一、〇〇六、七〇三	製材及木製品工業	八五、一〇七
金屬工業	二一七、六一二	印刷及製本業	六〇、五六九
機械器具工業	三六七、二六三	食料品工業	一五八、一二五
窯業	九二、六九八	「ガス」及電氣業	八、三九〇
化學工業	二二八、六三八	其ノ他ノ工業	一四四、一七二
		計	二、三六九、二七七

(2) 府縣別職工數

大阪	三二八、二八三	靜岡	七六、〇三七
東京	三〇四、三九三	神奈川	七五、五一一
愛知	二二二、一二二	長野	七五、一二五
兵庫	一八五、七七五	京都	七三、四六七
福岡	八四、三〇五	群馬	六〇、二八四

(三)原動機 昭和十年末現在に於ける工場數八五、一七四の內原動機を使用する工場は七三、三〇四で、全体の八六、一%に當る。此の原動機使用工場に於ける原動機總數は四八七、五三六臺で、其の內操業數は四四二、三六一臺で全体の九〇、七%を占め、休止及豫備の臺數は四五、一七五臺(九、三%)である。今總臺數に付前年の三六四、四二二臺に比較すると一二三、一一四臺の增加を示して居る。

次に昭和十年末現在に於ける原動機の實馬力總數は一〇、六六一、九三三馬力であつて、其の內操業中のものは九、五四八、七二七馬力で全体の八九、六%を占め、休止及豫備のものは一、一一三、二〇六馬力(一〇、四%)である。今實馬力總數に付前年の九、七〇三、五一一馬力に比較すると九五八、四二二馬力(九、九%)の增加を示して居る。茲に原動力の總臺數及實馬力總數の累年の數字を表示すると次の樣になる。

年次	總臺數	實馬力總數	年次	總臺數	實馬力總數
大正八年	六六、四〇〇	二、三二四、一六五	昭和六年	二一六、四八二	八、三四五、九六〇
大正十一年	八七、一一七	二、九四二、七三〇	昭和七年	二三六、二六六	八、三七〇、三六八
大正十三年	一〇八、〇三一	三、六三九、一四三	昭和八年	二八六、八五七	八、九二六、〇九二
昭和元年	一三〇、八八七	四、六五二、四七三	昭和九年	三六四、四二二	九、七〇三、五一一
昭和三年	一六二、〇五一	六、三八九、六六八	昭和十年	四八七、五三六	一〇、六六一、九三三
昭和五年	一八四、五五九	八、五三六、五三五			

更に昭和十年末現在に於ける原動機の總臺數及實馬力總數を工業別に表示とする次の樣になる。

工業別	總臺數	實馬力總數	工業別	總臺數	實馬力總數
紡織工業	一二四、八二八	一、一三九、八三八	化學工業	一七六、八四四	一、三一六、二五八
金屬工業	四一、八四一	一、一四〇、三三〇	製材及木製品工業	一一、七〇八	一七八、四七一
機械器具工業	六二、五五二	五五〇、二五二	印刷及製本業	一〇、四九九	三七、二八四
窯業	一二、二五一	五四二、〇二一	食料品工業	二九、一八三	二三九、五二九

「ガス」及電氣業	五、四六四	五、四四〇、二二七	其ノ他ノ工業	一二、三六六	七七、七二三
			計	四八七、五三六	一〇、六六一、九三三

尙原動機の種類は電動機、蒸汽機關、蒸汽タービン、ガス機關、石油機關、タービン水車、ベルトン水車、日本型水車の八種に分れるのであるが、今其の各々に付昭和十年末現在に於ける總臺數及實馬力總數を表示すると次の樣になる。

	總臺數	實馬力總數		總臺數	實馬力總數
電動機	四七五、九四三	四、四五八、一四四	石油機關	二、九〇四	七二、二一〇
蒸汽機關	四、九一二	二二五、六七四	タービン水車	九三三	二、七八三、七五一
蒸汽タービン	四七一	二、五三〇、一七一	ベルトン水車	二二六	五四一、七五六
ガス機關	七一一	四四、九〇一	日本型水車	一、四三六	五、三二六
			計	四八七、五三六	一〇、六六一、九三三

右の表で明である樣に、原動機總臺數四八七、五三六臺の內電動機は四七五、九四三臺であつて全体の九七、六%を占め、原動機の殆ど大部は電動機に依つて占められて居る狀態である。又實馬力數から見ても電動機は矢張り第一位を占めて居るが、然し原動機實馬力總數の四一、八%を占めて居るに止つて臺數に於けるが如く其の大部を占めて居らぬのは、電動機は蒸汽タービン、タービン水車に比し馬力數の比較的小さいものゝ多いのを意味して居る。

本邦統計の開祖
杉博士の事蹟

帝都壽雲樓にて　横山雅男

本邦統計の開祖杉博士が逝去せられて早くも三十五年とはなりぬ、今や我國の統計は時運の發展に伴ひ加ふるに中央及地方官廳並に公共團體の努力に因りて殆ど歐米諸國に遜色なきまでに進歩をなせり、豈に賀せざるべけんや。余は此の盛況を見て坐ろに感ずるは恩師杉先生が夙に幕末の頃より統計學を研究し明治三年政府の召しに應じて駿州より上京し、七月二十九日には統計の大に用うべきことを建議し、翌年十二月二十五日正院に政表課を創置せらるゝやその首席を占めて統計の實務を執り、爾來日夜統計の學術と事務とに鞅掌せられたる結果の賜と謂はざるべからず。而して左の一篇は明治三十五年十一月花房統計局長の草案に係り、その際念の爲め余に示されしものなり。寄せて會員諸彦に示す。若し之に因りて今後益々奮勵せらるれば望外の幸なり。

杉亨二は長崎の產なり。少にして蘭書を學び、始め醫學を修め緖方、杉田等の塾に歷遊し、佐野常民、神田孝平等と交り、夙に海外の事情に着目し、勝安房の薦に依て當時の閣老阿部伊勢守の知を得、海外渡航を謀る、偶々伊勢守殁し事中止す。尋て加藤弘之等と開成所教授職に擧げらる。當時亨二開成所に在て各國の新聞紙を閲し統計に着眼する所あり。後ち和蘭の統計書を讀み、益統計の要を感ず。已にして津田眞道、西周等の歸朝するや、其の說を聞き、其

の齎す所の書を讀み、是より專ら統計の事を攻む。明治二年靜岡に在るに當り、始めて藩主の爲め政表調の方法を案し之を該藩に施行せしが偶々廢藩に際し中止せりと雖我邦に於て歐洲近世の主義に準據し統計調査を實施せるは實に之を以て嚆矢とす。

明治三年亨二徵されて民部省に出仕し、政表の趣旨を論じ、其の書を大隈大藏大輔に呈す。幾くもなくして官を辭せり。太政官沿革志に曰く我邦政表の事を論ずる蓋し之を創始とすと。

四年十二月亨二再び徵され史官に籍し大主記に任ず。初め此年六月岩倉大納言旨を權少史安川繁成に傳へ日本政表及日本國勢要覽を編製せしむ、是れ我邦官府統計事務の濫觴なり。亨二の再び徵されたるは蓋し前年其の政表の事を論じ其の實務に通ずるを以てなり。亨二既に史官に在り、僅々二三の僚屬を指揮し、專ら政表の編製に從事し、五年二月辛未政表成り、四月に至り之を公刊す。其の書に大主記杉亨二編纂と署せり、蓋し官府統計書の公刊は之を以て始とす。

是より後明治十一二年迄の間毎年日本政表數部を刊行す其の事務は常に亨二の統督せる所なり。當時の政表なるもの往々散佚して今其の全豹を知るべからずと雖其の統計局に存するもの左の如し。

辛未政表	一
壬申政表	一
明治六年海外貿易表	一
明治七年日本政表刑事裁判、警察之部 陸海軍裁判	一
同 家祿賞典祿之部 府縣賦金之部	一
明治八年日本政表家祿賞典祿之部	一
同 警察之部	一
同 府縣稅及賦金之部	一
同 刑事裁判之部	一
同 陸海軍裁判之部	一
同 海外貿易之部	一
明治九年日本政表 海外貿易之部	一
明治十年 東京府下懲役場盜賊調	一
明治十年日本政表 海外貿易之部	一
同 警察之部	一
明治十一年日本政表 海外貿易之部	一

右等の書に依て之を見るに辛未政表、壬申政表の如き、當時維新草創の際に屬し、諸般の制度未だ完備せず、從て其の材料を得るの道亦容易ならざりし爲め其の裁する所は各職の職員及經費等に過ぎずと雖辛未政表の凡例に於て

「政表の務たる人事の變遷、土地の沿革、庶務の興廢等總て地上の萬有を網羅し以て全國の大勢を表示するに在り」と論じ、官府統計の目的を表示し「本課を立てられしより未だ日あらずして事尙備はらず、是を以て大綱擧り難き者多し。故に先づ其の易きに就き其の難きを後にす、此表に記する所の如きは僅に其の一班のみ」と辯ぜり。爾後年々の編纂物に依て之を見るに、漸次政表の區域を開拓せるの跡歷々として見るべし、當時統計思想未だ開けざるの時に當り亨二の經營苦心亦以て諒知すべし。

右政表載する所は往々單純なる原表に屬するものありと雖、明治六七年以後の政表は多くは別に原表に類するものありて、之より事實を摘錄し主として統計の數に依り國家現象の記述論究に力を效せるもの〻如し。

之に反し明治七年より着手せる明治六年以後同十年に至る年々の府縣民費調は直に材料を府縣に徵し當時の所謂民費なる者を各郡區毎に廿八項に分ち表章せるものにて當時に在ては地方財政に關する一大原表と視るを得べし。此の原表に依り亨二屢地方施政の狀況を論ぜりと聞く。然れども今其の書類存せざるを以て其の詳なるを知ることを得ず

亨二四年に史官に入てより、七年民費調を施行する迄僅々二年餘に過ぎず。初めは區々たる辛未壬申の二政表に過ぎざりしが、遽に發達して原表調査と論究記述の二大事務將に分劃せられんとするに至りしは迅速の進歩と謂はざるべからず。是れ亦主として亨二の盡力に由らずんばあらず。蓋し亨二終極の目的は、地上の萬有を網羅するに在りしと雖、必ずしも一時に之を實行せんとするにあらず。先づ一事一件に就き其の根本の調査を正し、而して其の調査を經たる者に就き各其の原因結果を研究し、以て漸次に國家萬般の方面に及ぼさんとせるもの〻如し。此の方針は將來國家統計の進歩を謀るに於て至良の方針にして、現今歐米先進國に於ける統計事務の實際も亦之に出ざるなり。

亨二又當時歐洲統計の現狀に着目し、萬國統計公會の開かる〻や、本邦名代人佛國モーリス、ブロツク氏に介して常に彼の事情を探り、我の統計事務の參考とせり。今日我統計局と各國統計官衙等の交通は亦端を此に發せり。

中央統計機關の擴張は亨二の亦屢建議せる所なり。太政官沿革志は常に其の着せられざるを記すと雖も初め四年僅々亨二の外三名の主記を以て開始せる政表課にして、十年の後統計院と稱する尤然たる一大機關に發達せるは、其の間に於て亨二の議必ず其の參考となりしは論を俟たざる所なるべし。

人別調は亨二の最も熱心に主唱せる所なり。初め之を辭

岡藩に行はんとして中道にして果さず。其の史官に入るに及んで建議すると一再に止らず。明治十二年廟議之を甲斐國に試行するに決し、亨二をして之を擔當せしむ。亨二拮据勉勵之に從事し、明治十五年を以て遂に甲斐國現在人別調の一書を完成公布せり。人別調とは單式の國勢調査なり。亨二又人別調は人員所靜の調なれば其の所動調之に伴はざるべからずとし、甲斐國の爲め人員運動調心得及雛形を立案し人を派して甲斐國地方機關の訓練に着手せりと雖偶々統計院の廢止と共に亨二亦廢官となりしを以て之を遂げず

以上は亨二在官中統計事務に關する事蹟とす。

亨二又統計の事務を實行せんには、先づ人才の養成を必要なりとし、後進の誘掖に勉め、公暇屢々僚屬を集め、諄々統計の學理を講じ、明治十四年統計院の官吏朝野の有志と謀り、宮內省の賜金と同志の醵金に依り共立統計學校を創立するや亨二推されて教授長となり、教務を統督し、生徒を指導し、明治十九年の初に至り卒業生及就學證明書を受けし者五十餘名を出せり。該校は統計院の廢止と共に閉鎖し、僚屬の講學亦亨二の退官と共に止みたりと雖、今日官府又は民間に在り統計に從事する者其の薫陶を受けたる者最も多しとす。

亨二又夙にスタチスチツク社を創設し、統計の學術事務の研究及普及を謀り、後ち統計學社と改稱し今尙其の社長たり、近年眼疾に罹り親しく社務を見ずと雖も該社は斯學に功績ある此の耆宿を戴くを以て名譽とし、而して東京統計協會も亦襲に之を其の名譽會員に推薦せり。

明治十三年亨二東京學士會院の學士となる。又明治六年以後民間明六社なるものあり、世人碩學の淵叢を以て之を目す、亨二其の社員たり、何れも統計に據り講話記述する所多し。

以上亨二が統計の學術及事務に於ける事蹟の梗概とす。蓋し維新の初より今日に至るまで、官に在ると野に在るとを論ぜず、其の統計の爲めに盡瘁すること三十餘年一日の如し、亦勉めたりと謂ふべし。而して其の官府統計の爲めに盡したるもの特に偉大なりと謂ふべし。

要するに維新草創の際に當て官府統計の創設運用實に亨二の力に依らざるはなし。爾後統計の中央府に在るもの十餘年、我邦官府統計の基礎を定むる亦亨二の力與つて多きに居る。就中人別調は亨二畢生の素志にして、今や國家の輿論國勢調査の必要を認むるに至れるもの亨二首唱の功に依らずと謂ふべからず。其の在職中實行せるものは甲斐一國の調査に止まれりと雖も、其の編纂に係る甲斐國現在人別調の卷首に揭ぐる方法及卷中諸表の製式に就て之を見るに實に能く歐洲近世の學理を應用せるものとす。我邦古來人別調に乏しからずと雖も、此の如き目的と方法を以て施行せるものは未だ嘗て之れあらず。此學の如きは後の國勢調査を計劃する者の爲歐洲近世の學理方法を我邦に應用し得べき實證を貽せるのみならず、其の結果は他日全國國勢調査の結果を得るに至つて先づ甲斐國民の社會的變遷を徵證すべき唯一の材料となり、從つて全國の趨勢を推測する倔强の材料たるべし。蓋し我邦に於て始めて全國に施行する國勢調査をして一層有効ならしむべきものは此の甲斐國の調査なりとす。

今や廟議明治三十八年を期し全國に國勢調査を施行せられんとす。此の機會を以て亨二が夙に統計の學術を首唱し之を事業に施し、就中國勢調査の一大要務たる人口調査に率先盡力せし事蹟を錄せられ、以て其の功勞を表彰するの榮典を賜はらば、獨り聖德を發揚する所以なるのみならず亦以て國家有益の功業を奬勵するの道ならん歟。本文參照の爲茲に亨二の履歷及太政官沿革志中亨二に關する各條の抄錄統計局保存する亨二編纂の書類を添付す。

尙亨二門人等の輯錄する所亨二講演集中其の實歷談二篇、就中雜誌太陽より轉載せるものは太政官沿革志と相照應するものあり又右講演集附錄には嘗て靜岡藩にて施行せる人別調の一班を載するを以て併せて之を進覽す

內閣統計講習生

內閣統計局では東京市本鄕區東京帝國大學內に於て左の科目に就き七月十九日より八月七日迄二十日間統計講習會を開催するが本縣よりは左の五名が聽講する。（〇印は統計協會より派遣者）

講習科目

一般統計　人口統計
勞働統計及生產指數調査　經濟統計
產業統計　數理統計

統計實務　經濟學
憲法及行政法　財政學

本縣派遣講習生

茨城縣巡査（下館署）　辻野信太郎
那珂郡小瀨村書記　〇橋本信雄
稻敷郡柴崎村書記　〇油原眞
筑波郡小野川村書記　〇成島一男
眞壁郡古里村書記　〇戸頃晋

統計模範町村視察記（十五）

富める者もないが 村に餓うる者なし

兒童に統計思想を普及

▽神田山沼堤より神大實村を望む△

神大實村へ

早めに來た梅雨空が朝からどんよりと曇つて如何にも重々しい六月六日の日曜日である。土浦驛で準急から降りた記者が休暇で上陸歸郷する海軍航空隊の兵士等と一緒に水海道行のバスに乘り込んだ頃から空模樣はいよ〳〵面白くなくなつて來たがそれでも水海道までは降らずに居た。それが境行のバスを待つ十分位の間に小糠雨となりだん〳〵大粒になつて來た。豊水橋を渡り豊岡村を走る頃は本降りとなつたが空は割合に明るかつた。午前十時過ぎ『この横町を少し行くと直ぐ神大實村役場です』と車掌嬢に教へられてバスを降りた頃はそれでも幾らか小降りになつて居た。統計主任書記羽富好氏と第一調査區調査員羽富益藏氏に迎へられて事務室に入る。日曜日と所得税調査とがぶつゝかつて役場の人達はその方へとられて忙しいとの事、雨空と櫻の葉陰で薄暗い事務室の壁に掲げてある横額に神大實村の由來が書いてある。それが即ち一寸珍らしい神大實村といふ村名の説明にもなつてゐるのである。その概要といふのは

明治二十年町村制施行の際神田山、大口、猫實といふ三ケ村の區域を一村にし舊三ケ村は大字として其の名稱を存し各大字から一字宛を採つて村名を神大實と命名してそれ以來變動なく今日に及んでゐる

といふのである。

地勢と面積

地形は稍東西に長く東は仁連川を距てゝ結城郡豊岡村に接し、南は北相馬郡の坂手、菅生兩村に連り西一帶は神田山沼（カドヤマヌマ）に面し對岸は七郷村と岩井町である。北は弓馬田、飯島の二村に接し西境に飯沼川があり南流して菅生沼に注いでゐる。そして利根川に通じてゐるので水運の便がある。全村殆んど洪積層より成る林野でその間を開墾して耕地としたもので今でも北部地方は林野が相連なり中部から西南部にも相當の林野がある。從つて水田が少なく各地に屈曲出入する低地がやうやく水田として耕作されて居るに過ぎずそれも谷津田で耕地五百九十町一反歩のうち百二十六町五反歩で畑の四百三十六町八反歩に比較すると三分の一にも足りない狀況である。地味は概して肥沃といふ譯にはゆかず唯僅かに大字大口の一部に沖積層の沃土があるだけである。面積は東西一里十二町南北一里三町で〇・六五方里で官有地三町九反七畝一歩、國有林野八町八反五畝二十一歩、民有地九百四町七反九畝八歩、合計九百十七町六反一畝二十九歩である。

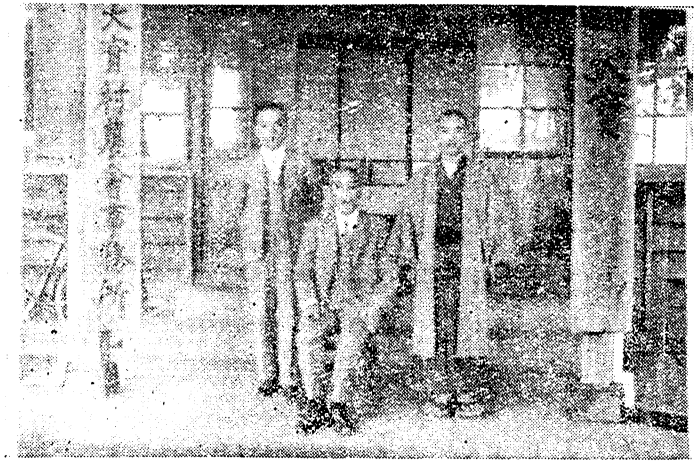
人口と職業

本籍人口は男二千二百六十六人、女二千百七人、計四千三百七十三人、現住人口は男一千七百四十三人、女一千七百十四人、計三千四百五十七人で出寄留は東京や千葉縣野田へ行く者が多く男六百十六人、女四百九十人、計一千百六人といふ數字を示して居る。之は地勢によるもので耕地が少い關係から子女が職場を他に求めなければならない狀態に置かれて居る爲で入寄留は之に比較すると少く男九十三人、女九十七人、計百九十人で出生は男七十五人、女七十九人、計百五十四人といふ數を昭和十年には示して居る。住民の職業を見ると農業が五百五十二（自作農百九十八、自作兼小作三百五十四、小作百）鑛業三、工業一、水産二、商業四十二、交通一、公務及自由業十三、其他四、計六百二十といふ分類である。

産物

古くは養蠶が相當に行はれて居たが煙草耕作者が增加して十一年度には二百十戸を數へ耕作反別も二十六町九反歩、收納六百二十五萬六千五百瓦（二萬五千百六十五圓八十二錢）の

巨額を占める樣になつたので養蠶は漸次衰勢を辿り昨年度は春蠶飼養は八十八戸で二千九百二十五貫（七千五十圓）夏秋蠶は九十戸の飼養で收繭一千五百六十三貫（七千百十八圓）といふ狀態である。それから茶も以前は相當に生產され品質もよく所謂猿島茶の產地として知られたのであるが近來機械製茶に押されて之亦頽勢を辿る悲境に陷り十一年度には從業二百四十七戸で五千六百十五貫（一萬二千五十五圓）の生產高である。之に代つて近來名聲をあげて居るのは西瓜と漬菜で東京や野田といふ大市場が近いといふ地理的關係に惠まれて漬菜は八萬六百二十四貫（八千六十二圓）西瓜は五萬二千百十九貫（五千二百十二圓）といふ生產高である。果實は梅、桃、生柿等を合せて二千五百四十三圓をあげ農產物の總計は二十八萬四千六百五十五圓であるが其の重なものを揭げて見ると左の通りである。



〔寫眞說明〕右から羽富調査員・海老原村長・羽富主任書記

△**米** 水粳二千五百十五石（七萬一千二百六十圓）陸粳一千二十五石（二萬六千六百五十圓）陸糯一千四百七十五石（三萬六千八百七十五圓）計五千四十五石（十三萬四千七百八十五圓）△**大麥** 三千二百十五石（三萬二千百五十圓）△**小麥** 三千五百七十九石（六萬四千四百二十二圓）△**大豆** 三百十五石（四千七百二十五圓）△**小豆** 八十四石（一千三百四十四圓）△**粟** 四百八十八石（四千八百八十圓）△**玉蜀黍** 八十九石（五百三十四圓）△**蕎麥** 百四十二石（一千五百六十二圓）△**甘藷** 十四萬八百二十四貫（九千八百五十八圓）△**馬鈴薯** 三萬二千四百六十八貫（三千二百四十七圓）△**胡麻** 九石（百八十圓）△**苧麻** 百六十七貫（二百六十七圓）△**蒟蒻芋** 三千七百二十貫（二千九百七十六圓）△**胡瓜** 三百八百一貫（三百八十圓）△**白瓜** 二千二百五貫（三百三十一圓）△**南瓜** 九千六百三十六貫（一千四百四十五圓）△**茄子** 一萬五百六十三貫（一千五十六圓）△**蕃茄** 二千六百五貫（二百八圓）△**大根** 三萬四千二百八十三貫（一千四百五十七圓）△**牛蒡** 七千三百貫（一千九十五圓）△**里芋** 二萬九千四百四十八貫（二千九百四十五圓）△**葱** 三千五百六十一貫（五百三十四圓）

役場の陣容

神大實村の十二年度豫算は貳萬六百拾壹圓でその大半が教育費に振向けられてゐることは他の町村と大差はない、豫算と其の運用に就てこの村の特徵とでもいふべきことは歲出は兎に角歲入の方で他の町村に誇るべきものがあらう。といふのは六年前には滯納者が多くその整理をどうしたらいゝかと困惑したものであつたが僅五年間にすつかり整理をし十一年度には滯納が自轉車稅一件、金額にして僅か一圓二十四錢といふだけになつた。而も五年間の期間內完納者二百四人といふ成績を示してゐる。之は從來納稅區を村內十二區として農家組合で取扱つてゐたものを六年前に納稅組合の取扱にして納稅思想の普及と其の實行を督勵した結果によるもので納稅奬勵方法としては組合表彰をするのは勿論個人の成績を調査して優良なものを表彰する樣にした、賞品といつても僅かに手拭一本であるが野良に出てその手拭を頰かぶりでもすれば『納稅優良者』といふ看板をかけた樣なもので自然に納稅奬勵になるといふ風で今日の成果をあげたもので、統計優良町村は村治にも亦好成績を收めるといふ實證をしてゐると思ふこの輝かしい神大實村役場の陣容は村長海老原萬吉（庶務）助役前山等戒（戶籍兵事）收入役針替利雄（會計）書記針替磯吉（稅務）書記羽富好（統計稅務）書記岸本眞雄（學事衞生庶務）諸氏といふ顏觸れで海老原村長は收入役、助役を經て既に三期も村長として勤續してゐる溫厚な村の長老である。前山助役は三十四年も村役場に勤續し生字引といはれ村內の家庭の事情はすつかり暗記して居るといふ風で戶籍功勞者として水戶裁判所から表彰され、針替收入役は自治功勞者として縣から表彰され、稅務擔任の針替書記も猿島稅務研究會から表彰されてゐる。

統計調査員

統計の成績が神大實村は何故良いのか。それは納稅の成績が良好なのと同一理由だといつても差支あるまい。納稅期日になつても村長が納稅を忘れて居ると針替收入役が『村長さん今日は納稅日ですよ』と催促するのと同じ筆法で統計主任の羽富書記が調査員を督勵して期日を嚴守するといふ熱心さがあるからだ。羽富書記は曾つて縣統計協會から功勞者として表彰を受けてゐるのは勿論である。納稅に組合員が自覺した樣に統計に關しても調査員と住民が理解して居るからである。現在神大實村の統計調査區は九區になつて居て其の調査員は、

調査區	勤續年數	氏名	年齡
第一	八年四ヶ月	羽富益藏	（三三）
第二	二ヶ月	倉持賢一郎	（三七）

第三	一年二ヶ月	海老原　順	（四〇）
第四	二二年六ヶ月	針替　善吉	（六一）
第五	二年二ヶ月	松崎　安二郎	（三三）
第六	九年	横張　一郎	（四七）
第七	一〇年	山口　傳造	（六〇）
第八	二ヶ月	石塚　重雄	（二三）
第九	二ヶ月	伊藤　柳馬	（二三）

右の通りである。海老原村長の話では縣が始めて統計補助費を交付した時には村の豫算に統計などといふ項目がなかつた程であつたのが今では縣下の統計模範村となつた、その間の苦心に就て第一調査區調査員羽富益藏氏は語る。

私は父の名儀時代からにしますと約十年統計調査に從事して居りますが土地臺帳と實際の移動には一番苦心致しました。此の村では飯沼川改修と縣道改修の爲地目が著しく移動したからです。昭和四年二月一日現在の調査原簿に地番號の一、二、五などがなかつた。又八十番は八反余歩を一小票で取扱はねばならないといふ風で從つて實際の取扱にも調査の正確を期する上からも不便だつたので昭和十一年に補助簿を作つて之を訂正し八十番などは十一筆に分けました。第一調査區だけで申しましても畑七百十五筆を八百三十九筆に、田二百八筆を百八十七筆に改訂しました。

忙しい農業の片手間に耕地や山林の實地調査をして原簿の改訂をするといふ事は實際容易な事ではない。羽富統計主任書記は統計事務の刷新充實に就て語る。

昭和九年に統計速報を出しました、村内の各種統計の調査が纏る毎に印刷して各戸に配付したのです。之は統計思想を普及するばかりでなく産業經濟の現況や村内の現狀を周知させる事が出來て非常に効果があり、從つて調査員の自覺を促し勉勵する樣になりました。又映畫會を催したり兒童に統計作圖をさせるのです。それから家禽調査の時には小學生を手傳はせ各戸の鷄を勘定させるのです。之は正確を期するのと兒童に統計思想を植ゑつけるといふ一石二鳥の効果があります。それから家畜家禽調査簿を調査員に交付して居ります。

家禽調査に兒童を利用し統計作圖を小學生にさせるといふ事は學校當局の理解ある援助による方法として統計觀念の涵養普及上誠に妙案だらうと思ふ。三つ子の魂百迄といふが斯ういふ風にすれば神大實村の統計成績は現在ばかりでなくその兒童が成人した後に於ても必ず他の模範となり得るのではあるまいか。

村の誇り

統計や納税の成績が良いといふ事以外に神大實村の誇りともいふべきものは何でせうかと村長さんに質問したら、海老原村長は『サア何でせうなア、何しろこの村は貧乏村で多額納税者は一人もなし、衆議院はおろか縣會議員さへ出た事が無い始末ですから……』と自慢話の種を見出すのに當惑顏で

ある。だん／＼話をして居るうちに記者は大なる誇りを發見した。といふのは、神大實村は極めて純朴な人達ばかりで小作爭議で有名な菅生村が直ぐ隣りであり、耕作者がお互に入り込んで居るにも拘らずその惡風に全然染んでゐないこと。また政黨色といふものが微塵もなく村治が實に圓滑に運用され選擧法實施以來未だ一人の違反者も出さないこと。更に驚嘆に値することは多額納税者も無い代り救護を要する者もない、即ち富が平均されて居るといふことである。爭が無く圓滿である。滯納者がない。各種選擧を通じて一人の違反者もない。村内に二人の餓うる者もないといふ、之が自治の要諦極致ではあるまいか。海老原村長は二十何年か前に構築された飯沼川閘門が今でも工科大學の參考になつて居るといふのが如何にも自慢らしく話されたがそれなどは足許へ及びもつかぬ話である。村の誇りが無いどころか、之程大きな誇りがあるであらうか。

舊蹟と傳說

石器時代住民の遺跡として今でも石器の破片が發見されるので東浦は舊蹟に數へられてゐる。坊地塚といふものは千數百年前の築造にかゝる古墳で石廓だの埴輪などが見られる。延命院といふお寺がある、之は德川二代將軍が下總を治めるには平將門の靈を慰めなければならぬといふので建立したものだと傳へられてゐる。一体平將門の傳說は縣の西南部には至るところにあるのであるが内務省屬織田完之氏の調査記には將門が天行三年討死したのは今の神大實村神田山地内で胴体を此所に埋めその首級を石井（今の岩井町）の井戸で洗ひ京に持ち行つたと記されてゐる。神田山を一名將門山ともいひ、將門の法名を神田院殿といふ所から考へてもこの傳說は萬更でないものらしい。一昨年の洪水で欠潰した神田山沼の堤防や飯沼川閘門などを視察したら思はず時を過した。各種材料の說明や視察の案内をして下さつた海老原村長、羽富書記の好意に感謝し乍ら神大實村を辭したのは午後三時頃、幸ひ雨もどうやらやんでゐた。

統計事務講習會

統計智識の涵養と實務の修練を目的として本縣主催第十六回統計事務講習會を左記要項に依り開催するとゝなつた。講習員は役場員及統計調査員で出席者は氏名を七月十五日迄に統計課へ申込まれたいと。

記

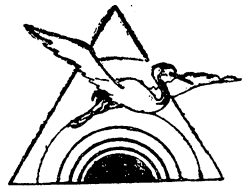
一　會期　七月二十七日（火曜）より七月二十九日（木曜）迄三日間

一　會場　那珂郡湊町縣立商業學校講堂

一　講師　農林省統計官補　堀田武夫氏

一　講習科目　農林統計

一　講習時間　毎日午前八時より正午迄



第一回の慰勞會は調査員の反省研究會

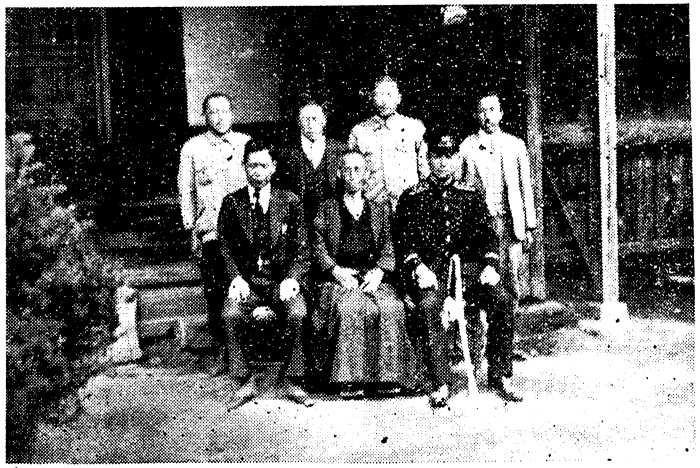
相續者を選んで異動を避く

縣北小里村へ

舊の端午を明日にした六月十二日といふのに肌寒さを覺える朝である。七時半水戸發のバスは大麥の刈取に忙しい沿道の風景を縫つて八時二十分太田に着いた。そこには小里行のバスがエンジンをかけて待つて居た。二月に中里村を視察する時乘つたバスは相當古くて乘心地も惡かつたが僅か四五ケ月の間に經營者も變つた爲か自動車は可成り新しいものであつた。數年前迄この道がトテ馬車を唯一の交通機關として居たのを思ひ出すと余りに急激な變遷で却つてトテ馬車に搖られ乍ら進んだ方が詩的な樣な氣持にもなる。里川に沿つて走るバスはそれでも北原白秋の『この道はいつか來た道……』といふ詩を記者の腦裡に呼び戻した。中里村を過ぎる頃から里川の峽はいよ〳〵狹められた。兩岸の山が迫り、岩肌を現はして賀美村のあたりは如何にも奥まつた感じを與へる。太田で十人許り乘つた客は大概降りて次から次へと新しい客に替つて了つた。麥を刈つたり田に働く女達もモンペ姿になつてしまつた。乘り込む人達の訛も幾分變つて來た、小里村に入ると山懷は幾らか廣がつた。大中の宿に差しかゝると一台のトラックが止まつて居る。一人の男が鈴を振り乍らメガホンを口に當てゝ何か呶鳴つて居る。野良着やエプロン姿の主婦さんがトラックの側に行くと上の男は箱の中から鰹を握み出して渡す。他の娘等は軒下を流れる溝川で鰹を洗つて居る。聞けば久慈濱の鰹が大漁だつたので乘り込んで來た鰹の行商隊なのだ相な。明日のお節句の御馳走仕込といふのだらう。小中の終点でバスを降り一町ほど歩くと左側の小高い所に

◇…小里村役場

といふ看板が掲げてある。硝子窓こそはあるが如何にも古い建物である。統計主任の小田部書記に出迎へられ疊敷の會議室へ案内され白石助役と初對面の挨拶を交はし澁茶に咽喉を濕ほして居ると空模樣が如何にも怪しくなつて來たので記念撮影だけでも早く濟ませたいといふ考へで適當な所をと指定を依頼すると、白石助役も小田部書記も『まア種馬所でせう』との話、水戸から十二里といへば土浦と同じ距離だが四里も行けば福島縣の棚倉で鐵道には一番近いのである、從つて此の地方は昔から交通不便で馬を唯一の交通機關として居り飼養生産共に縣下有數のもので福島種馬所の管内に屬し小里市場の成績は相當なもので名勝も舊跡もない小里村としては此所を第一に推すより他にないのであらう。小田部書記の案内で先づ小里種馬所の參觀に出かける。小里馬市場が即ち種馬所で村内飼養の四百頭に四月十日から七月三日迄の期間に種付をするので隆雪號、武盛號といふ樣な國有種牡馬が配付されて居る。受胎率は六分三厘で大体全國平均の成積といふところで一年間に約百五六十頭の産駒である相だ。小里市場の糶も十一年度の入場百六十九頭で一萬二千四百余圓の價格を示し平均七十三圓五十一錢余になつて居る相だ。明治四十四年縣の奬勵に基づいて組合立として創設されて以來幾多の變遷を見産縣馬組合小里支所と稱する今日に至つたのであるが中里、賀美、生瀬、高倉など〻いふ附近各村の取引に比し最高價格も平均價格も共に斷然頭角を表はして居るのを見ても改良進歩の程が察せられるであらう。茨城縣最北端山又山に圍まれた小里村ではあるが産馬地として有名になつたのは此の惠まれない環境が然らしめたものともいへやう。農繁期で種付が今日は休みなので種牡馬の厩舎を參觀して引上げ再び役場に入つて事績簿から繰り始める。



小里村役場員〔前列右から〕長部書記・廣瀬巡査・白石助役・小田部書記（列後）・白石定氏・小倉高書記・野澤書記・野澤金一郎氏・長谷川氏・田中氏・小里村農會技手

◇…小里村の起源

この邊を記してあるのでも相當古くからヲサトと稱せられては判然としないが常陸國誌に雄薩驛と

居たものと見える。里川流域を佐都の郷といひ其の上流の小區域をなして居るので小里と呼んだのではあるまいか。明治維新前は多賀郡に屬し舊水戸藩の所領だつたので多賀郡を總括する役所は多賀郡大久保村にあつたが事ある毎に重疊たる山岳險路を越え久慈郡太田町を經石名坂を迂廻しなければならぬ不便があつたので廢藩置縣の後は黑坂、小菅、折橋、大中、小中、小妻、德田、里川新田の九村を併合し第十四大區五の小區と稱し扱所を小中に置いた。明治六年第二大區十小區と改稱し上君田、下君田の兩村を加へ、明治十一年郡區編成の際黑坂、上君田、下君田の三村を除く外久慈郡に屬し大中、小中、小妻、德田、里川新田の五ケ村で一聯合とし明治十七年の改正にも同區域内を以つて一聯合を組織した。明治二十二年自治制を施行するにも同區域内を一村とし小里と稱し從來の各村を大字と呼ぶ樣になつたものである。現在村役場は小中にあつて

職名	就職年月	氏名
村長	昭和十二年四月	高倉信次郎
助役	同 八年四月	白石重次
收入役	大正十三年五月	高島甚太郎
書記	大正九年六月	白石定
同	同 十四年五月	澤野勝壽
同	年六月	小田部嘉一
農會書記	昭和十一年四月	高倉勤
農會技手	同 八年五月	金澤正男

といふ陣容で一致協力村の繁榮に努力してゐる。豫算は二萬五千七百余圓で他の町村と余り變りがないが今年は村役場改築の爲四千余圓の臨時支出が議決濟みになつてゐる。此の村は地理的關係も手傳つて金持が相當にあるかと思ふと一面には貧しいものもある。納稅狀況も荒蒔、高倉兩氏を始めとする所謂八人組有產階級の納稅額は其の他の約八百戸の納稅額を遙に凌いでゐるといふ狀態である。從つて今迄相當に名を知られた貴族院議員高倉虎氏であるとか、陸軍中將荒蒔義勝氏であるとか、醫學博士荒蒔義秀氏であるとかは何れも所謂八人組一族の出である。

◇…小里村の面積

は四・七二方里で東西一里五町、南北四里十八町で久慈の東北隅に位し東は多賀郡高岡村と一帶の山脈で境し北は三鈷室の山脈が逆亘して福島縣東白川郡豊里村及び笹原と隣り、西は生瀨村に接し南は賀美村に隣して居る、地形は南北に長く東西に狹い關係から殆んど烏帽子の樣で里川が其の中央を貫流し北部及び東西は山嶽重疊し中部以南は里川の兩岸が平坦で耕地が多く地味は砂質及び礫質壤土で森林や農作物の生育に適して居る。人口は本籍人口男二千七百四十八人、女二千八百四人、計五千五百五十二人で出寄留者は男一千十一人、女九百四十六人、計一千九百六十三人で入寄留者は男三百七人、女二百八十四人、計五百九十一人あり、現住人口は男一千九百五十二人、女二千百五人、計四千五十七人で現住戸數八百二戸、一戸平均五・〇六人になつてゐる。昨年の出生は男九十八人、女百五人、計二百三人、又同年の死亡は男四十人、女四十二人、計八十二人である。住民の職業を見れば農業が五百八十四戸（自作農二百二十三戸、自作兼小作農百八十五戸、小作農百七十六戸）絶對多數で工業四十五戸、商業五十七戸、交通業六戸、公務及び自由業四十五戸、其他六十一戸、無業九戸となつてゐる。生產物中年額千圓を越ゆるものを擧げれば

水粳四千九百八十二石（十三萬四千五百十四圓）水糯六百五十八石（一萬八千四百二十四圓）陸粳二十一石（五百四圓）陸糯六十七石（一千六百七十五圓）米計五千七百二十八石（十五萬五千百十七圓）大麥一千百九十三石（一萬七百三十七圓）稞麥二千三百九十二石（八百十九圓）小麥二千七百七十三石（一萬四千四百三十二圓）大豆三百六十六石（五千八百五十六圓）小豆五十石（一千圓）蕎麥三百九石（四千十七圓）甘藷一萬六千九十貫（一千六百九圓）馬鈴薯一萬百六十九貫（一千十七圓）菎蒟芋三千二百三貫（一千九百二十二圓）茶二百七十五貫（一千百八十三圓）木炭十八萬四千九百六十貫（三萬六百七圓）木材五千五百七十石（一萬二千六百四十圓）薪炭材一千九百八十二棚（六千三百四十二圓）

なほこの外葉煙草が四十七萬九千三百八十瓦（三萬六千四百五十三圓）清酒三百石（二萬一千九百九十圓）醬油五十五石（二千二百圓）樹皮一萬六千三百七十四坪（二千二百圓）柴草三十萬貫（六千圓）等があり、養蠶戸數は春蠶八十五戸、夏秋蠶百七十七戸で春は黃繭一千五百五十一貫（七千百七十四圓）夏秋蠶は白繭四千八十八貫（一萬九千七百三十三圓）の收穫を見てゐる。家畜は何といつても馬が王座を占め飼養戸數三百四十八戸で六百五十二頭を飼育し年に百六十頭（一萬二千圓）の生產で豚は四十四戸百三頭で約七十頭の生產を見てゐる。最近に至つて木材運搬には馬よりも牛の方が適して居るといふので役牛が十五頭飼養される樣になつたのは注目に値するもので鷄は飼養戸數三百十七戸で成鷄一千六百十羽、雛一千七百十七羽、計一千二百五十四圓の生產で產卵は一年間三十萬四千三十五個（四千八十一圓）である。之等の

◇…統計調査は

村内を十一區に分け夫に功勞者として縣から表彰された小田部主任書記の監督指導によつて遺漏なきを期して居り近頃は成るべく若い人を選任する方針との事であるがそれも次三男を委囑すると異動が多いので大概一家の相續者を物色任命して居るといふ話である。現在は

調査區	發令年月	氏名	年齡
第一區	大正十五年一月	佐藤信敬	(四八)
第二區	大正十五年七月	飯島仙三郎	(五三)
第三區	昭和六年四月	吉村良房	(二七)
第四區	同十一年二月	高星爲彦	(四一)
第五區	同十二年一月	佐藤長次	(二五)
第六區	同二年十二月	沼田耕一	(三二)
第七區	同四年五月	高倉節治	(三九)
第八區	同	豊田兼太郎	(三三)
第九區	大正十五年一月	酒井平	(三五)
第十區	昭和二年十二月	沼田松元	(三三)
第十一區	同六年四月	磯野卯之吉	(五九)

右の諸氏で第二區の飯島仙三郎氏は一昨年縣統計協會から表彰されてゐる。小里村當局は調査員の活動に對しては比較的同情ある援助を與へて居る。即ち調査員手當は一人當り二十五圓を支給して居り米生産統計手當を加へると二十九圓となるので他町村に比して稍優遇して居る譯である。今年の村會議員選擧で調査員か二名當選したので統計事務の運用に一層便宜が與へられるだらうと小田部主任書記は喜んで居た。調査員の集合は各調査を合せて年四回、それに米生産調査の二回を加へて年六回打合せの協議をすることになつてゐるがその中一回は慰勞を兼ねて過去一年間の成績を省みて調査員相互に研究切瑳し合ふ機會をつくる事にしてゐる相だ。一通り書類調査が終つた時である。『お茶が入りましたからどうぞこちらへ』と案内されたのが事務室裡手の部屋、葺下げになつてゐる薄暗い小使部屋でゝもあらうか、中央の爐にカン〳〵と炭火が焚かれそれを圍んで役場員一同が茶を啜つて居る。けふは土曜日なのであみだを引いて柏餅を買ひ込んでの大盤振舞である。一息ついて小田部書記を促し調査員の

◇…苦心談でも

聞かうと役場に別れて五六丁、坂道を辿つて第六區擔當の沼田耕一さんを訪問すると田植に出て居るといふのでまた五六町田圃を縫つて沼田さんに會ふ事が出來た。午後三時頃だつたが今から二段歩ばかり植ゑるのだとの話なので書類をお見せしたいのですといふのを遠慮し本年五月に開廳式を擧行したばかりの農事試驗場小里冷害試驗場の赫い屋根が見える畦に肥料入れの叺を敷いて腰を下した。馬が田を搔いて居ると小馬は周圍の畦を跳ね〳〵母馬に親しんでゐるのを眺め乍ら小田部書記が

七八年前迄はこの村でも統計調査に行くと何か税金關係でもあるかと誤解して五俵確實と思へる田でも收穫は三俵だといひおまけに成るべく内場にお願致しますといつた風で仲々正確な調査が困難でしたがね

と話を切り出せば沼田調査員は『今では一般が理解して統計調査は非常に樂になりました、坪刈豫想と實收との數字が一致した時などは何ともいへない愉快さです』と統計調査の苦勞よりも先づその樂しみから話り、更に

近頃は調査の方も馴れて米生産統計や春季調査は相當にうまくいつてゐます。夏作は六ケ敷しいですね。統計調査も初めは原簿もなければ耕地圖もなしに米なら三升播を一反として見積つたので今から考へると冷汗が流れる樣です。唯小里村は山が多く山林調査は對人調査よりないので苦勞する事があります。

參考になる話は泉の樣に盡きないが仕事の邪魔になるのを恐れて間もなく別れを告げる。昭和八九兩年引續いて冷害を蒙り經濟更生計劃を立案した時には二十三萬六千余圓の負債があつたが三年そこ〳〵で半額に減ずる事が出來今年からは經濟更生に關し農林省の特別指定村になつたので七月迄には更生立案をすると意氣込んでゐる。小里村で有名な話は常陸國誌にある

◇…義公が賞した

節婦農夫權右衞門の婦かね女の事蹟であらう。貞芳院さまからも『萬代を松にちきりて若のうらのなみゆたかにも遊ぶ友つる』と歌を賜はつたかね女の後裔は代々馬口勞を營み當主星喜一氏も獸醫として小里村産馬振興の爲に貢獻してゐる。その德化でもあらうか忠次郎の妻高島いし女も明治十年知事から節婦として表彰され巳之次郎妻鳴志田うめ女が矢張り節婦として知事から表彰されたのはつい數年前の事である。縣北山間の小里村は天然文化には比較的惠まれないといつても過ちではあるまい、而も今日統計模範村とされて居るのは全く人の努力によるものであらうといふ感想を附記してこの視察記を結ぶことにする。

統計思想普及映畫會

大部分の農村では既に田植も終り何かの慰安を求むる時期となつたので本縣統計協會では統計思想普及と農家の慰安とを兼ねて本年も映畫並講演會を開催することゝなつた。既に關南、關本、沼里、源清田、生子菅、猿島、上大津、下大野各村では終了し今後も左記日割で開催されるが農村に於ても非常に期待してゐるから前年に劣らぬ好成績を收めるであらう。

七月十九日波野村△二十日豊郷村△二十三日波里村△二十四日飯富村△八月二日靜村△三日國田村△十三日生瀬村△十四日袋田村△十六日上山川村△十七日飯沼村△十九日現原村△二十日大生原村△二十四日黒子村△二十五日小梨村△二十七日烏名村△二十八日福岡村△九月二日相馬町△三日井野村△六日大原村△七日北川根村

實務道場

統計調査の栞 (16)

春から夏への勞苦が報いられる秋の稔り

調査員の手腕を揮ふ時

農繁時期の骨休みも出來ないうちに來た盛夏である。農家は田に畑に汗と土にまみれての戰爭である。國民の、縣民の糧食穫得に奮鬪し、生産戰線の第一線に躍進を續ける雄々しい姿こそは尊くも氣高い限りである。『起てる農夫は座せる紳士よりも高い』といふ西諺は眞實である。

煮へかへる水田にも燒きつく畑にも天職の尊さと秋の稔りの期待があればこそ不平もなく働けるのであらう。斯ういふ血と汗の生産戰線の調査に當る統計關係者の任務は重大である。殊に重要な水稻作況調査、米第一回豫想收穫高調査等を控へてゐる 統計調査員各位の責任は重い。一人の誤りは一町村の過ちとなり、一縣の過失となり我が國統計の基礎を誤るものである。今から愼重な準備を整へて統計の權威の爲に奮鬪する事にしやうではないか。

□水稻作況

（市町村報告期八月十五日限）

水稻作況は、其の管内の作況を觀察して、普通作況に比し五分以上を增收する見込の場合を良とし、五分以内の增收見込の場合を稍良とし、普通作況の見込の場合を普通とし、五分以内減收見込の場合を稍不良とし、減收五分を超ゆる見込の場合を不良として、即ち五段階級の其の何れかに依り報告するのでありますが、此の普通作とか、或は增收何割何分、減收何分とかの割合は作況であるから、市町村の收穫量とは必ずしも關係は有しない、例へば水田の埋立地が多いとか、或は植付不能の地が非常に多いとかで、作付反別が激減して、其の管内の收穫が非常に減ずる樣な場合があつても、作付た箇々の田が反收に於て從來よりも增收の場合は稍良とか良となる場合を生ずるのであります。尙此處で普通作況と謂ふのは前五ケ年間に於ける中庸の作柄を指すので之に對しての比較を左の五段階級の一で表示することゝなる。此の表は八月十五日現在の調査を十八日迄に縣へ到達する樣報告するを要するのでありますから、期日迄に到着せぬ見込の場合は、電信、電話等の方法に依り速報せられたいのであります。

□米第一回豫想收穫高

（市町村報告期九月廿三日限）

本調査は九月廿日現在に依り調査し九月廿三日迄に縣廳へ到達する樣急速報告を要する重要な統計でありますから次の注意を參照し遺憾なき調査を遂行せられたいのであります。

本表に揭上する作付反別は本表を纏むる必要上既に九月二十日迄に調査員をして其の調査區内に於ける米作地を一筆毎に米生産統計調査取扱方に依り調査するもので即ち作付反別調査原簿及耕地圖又は米作地圖に依り各筆毎に作付の粳米糯米の區別、上中下の作柄の區別を調査し之を各集計して最後に水陸稻の作柄毎の反別を其の作柄毎の一段步豫想收穫高に乘じて各作柄毎の收穫高を得、各作付反別及收穫高の作柄別を合計して本表に必要の數を得るのでありますが一旦作付したものが無收穫となる場合には之が反別をも加へねばなりません。

而して一反步豫想收穫高を調査する場合には特に細密に受持調査區内の作柄の狀況を調査し且精農家數名の意見をも徵して最も愼重に決定する必要があります。尙報告に際しては備考欄の所定事項を洩れなく記載すると共に指定の期日迄に到達せざる見込の場合は電報電話等敏達の方法に依り一先づ報告を願ひます。

□米作農家戸數調

（市町村報告期九月二十三日限）

本調査は九月二十日現在を以て各調査員が其の擔當調査區内に於ける米作農家と米作準農家に付いて調査するものですが特に左記事項に留意し誤りなきを期せられたいのです。

一、米作農家とは世帶員中米作を爲すものある世帶を計上し、又米作準農家とは學校、試驗場、組合、會社其の他法人又は團体にして米作を爲すものを計上すること管理者を置きて米作を爲す場合には其の管理者に付前項の區分に從つて夫々計上のこと

二、米作農家數及米作準農家數の計上に當りては其の經營耕地の所在の如何に拘らず米作農家又は米作準農家所在の市町村に於て之を計上すること

三、米作農家一覽を其の儘利用する時は必ず重復計上する樣な虞れがありますから之は絕對に避けられ飽くまで實地調査を施行し計上すること

四、米作準農家の種別を明かならしむる爲に必ず其の名稱を備考に記載すること

五、調査の上は必ず前年と對照し其の增減

事由を備考へ記載すること

□一段歩收穫高並單價

麥及綠肥の前年に於ける反當收量及單價は前號に掲載したが、其の他のものに付掲載すれば次の通りである

園藝農產物蔬菜及花卉

	反當收量	單價			
エンドウ	一・一二九合	(石)一二・七〇錢	インゲンマメ	〇・九四四合	(石)一二・八一錢
ソラマメ	一・三三八合	(仝)一二・〇四錢	ナタネ	一・〇〇八合	(石)一九・〇〇錢

食用農產物

ジャガイモ	三五一貫	(貫)	九錢

工藝農產物

寄贈圖書

昭和十一年綿織物及絹織物年表	商工大臣官房統計課	昭和十二年福岡縣勢要覽	福岡縣統計課
仝　賃銀統計表	仝	茨城縣氣象年報	水戸測候所
仝　物價統計表	仝	結城郡豊岡村勢要覽	豊岡村役場
昭和十年工場統計表	仝	昭和十一年農作物賃銀統計表	農林大臣官房統計課
昭和十一年關東局管內現住人口統計	關東局	統計	高知縣統計協會
水海道町要覽	水海道町役場	各國產業分類及職業分類	內閣統計局
德島縣統計時報第十一號	德島縣統計協會	昭和十年大分縣統計書第一、二、三、四編	大分縣
昭和十年朝鮮國勢調査報告	朝鮮總督府	昭和十年國勢調査報告大阪編	內閣統計局
資源　第七卷第四號	資源局	統計時報	仝
統計、五、六月號	千葉縣統計協會	昭和十年死因統計	仝
いしずゑ　五、六月號	福岡縣統計協會	賃銀統計月報	仝
浪華の鏡　五、六月號	大阪府統計協會	昭和十一年東京株式取引所統計年報	東京株式取引所調査課
北海道統計　第四十八號	北海道統計協會	昭和十年輸出入貨物取引港別又ハ國別	內務省土木局
昭和十年拓務統計	拓務大臣官房文書課		

春蠶豫想收繭高

百八十八萬八千餘貫

掃立の增加と桑葉や天候に惠まれて

昨年の收繭高よりも三分二厘の增收

縣下の昭和十二年春蠶豫想收繭高に就き總務部統計課が六月十五日現在により調査した結果は同月二十六日公表されたが本年の春蠶は繭價高を見越し掃立數量が增加し桑葉の發育が良好であつたのと掃立後の氣候が順調で病蠶等の發生が少なかつた爲豫想收繭高は白繭三十萬五千九百貫、黃繭百五十八萬二千六百六十貫、合計百八十八萬八千五百六十貫で前年收繭高百八十二萬九千八百六十六貫に比し五萬八千六百九十四貫即ち零割三分二厘の增收を見るものと豫想された。郡市別の豫想收繭高及び前年收繭高に對する增減は左の如くである(單位は貫、前年對比中△印は減其の他は增)

郡市別	豫想收繭高 白繭	黃繭	計	前年對比增減
水戸	三一〇	一、三六〇	一、五七〇	△ 一〇三
東茨城	四一、八七〇	九二、七二〇	一三四、五九〇	△ 一二、〇九九
西茨城	二一〇、三九〇	四七、一八〇	二六七、五七〇	△ 二、四〇二
那珂	一八、三一〇	四五、九八〇	六四、一九〇	△ 七七七
久慈	四、五七〇	五三、〇四〇	五七、六一〇	△ 五、六三三
多賀	一、八〇〇	二、八四〇	四、六四〇	△ 一、四二三
鹿島	一〇、六九〇	七二、九二〇	八三、六一〇	△ 六、八一〇
行方	一三、八四〇	六三、九三〇	七七、七七〇	二、一四七
稻敷	五六、五一〇	一九〇、二一〇	二四六、七二〇	五、一九八
新治	五四、四三〇	二七〇、九三〇	三二五、三六〇	二、九一八
筑波	二二、九七〇	二三六、七三〇	二五九、七〇〇	一九、八七二
眞壁	六、八四〇	一五〇、〇一〇	一五六、八五〇	二、〇九〇
結城	四、六八〇	二四二、二七〇	二四六、九五〇	二七、七〇〇
猿島	三二、一七〇	四七、八七〇	八〇、〇四〇	四、四〇一
北相馬	一六、六三〇	六四、六九〇	八一、三二〇	三、六五二
合計	三〇五、九〇〇	一、五八二、六六〇	一、八八八、五六〇	五八、六九四

麥類は前年に比し
十萬三千餘石の增收
本年の豫想高公表さる

縣統計課から六月三日公表された本縣に於ける昭和十二年麥豫想收穫高によると作付反別は大麥三萬三千百七十八町五反歩で前年よりも三百七十六町二反歩(一分一厘)減じ裸麥は二千七百二十四町歩で之か亦前年より七町七反(三厘)減じて居るが小麥は五萬三千四百八十五町四反歩の作付で前年よりは三千五町五反歩(六分)增し麥類合計の作付反別は八萬九千三百八十七町九反歩で前年よりは二千五百十六町六反歩(二分九厘)增して居る。本年の作柄狀況は冬の期間が比較的高温多雨だつたので軟弱に伸長した樣に思はれたが春になつて氣候が平常に復したので寒氣と冷氣とで一時發育を害し又一部地方に病害が發生したけれども其の後順調な天候に依つて相當に恢復し作付反別の增加と前年の樣な甚しい雪害がなかつたので五月二十日現在の麥豫想收穫高は大麥八十萬七千八百石、裸麥四萬一千六百石、小麥七十六萬三千五百二十石、計百六十一萬二千九百二十石の見込である。之を前年の收穫高に比較すると大麥は三萬二千百七十三石(四分一厘)、裸麥は一千九百二十八石(四分九厘)、小麥は六萬九千五百九十五石(一割)、計十萬三千六百九十六石(六分九厘)の何れも增收を豫想されてゐる。各郡市別に示せば左の通りである。

(作付反別の單位は反、收穫高は石、前年收穫高との對比に於て△は減で共他は何れも增收である。)

	大麥 作付反別	大麥 豫想收穫高	大麥 前年收穫高ニ比シ增減	裸麥 作付反別	裸麥 豫想收穫高	裸麥 前年收穫高ニ比シ增減	小麥 作付反別	小麥 豫想收穫高	小麥 前年收穫高ニ比シ增減
	町反	石	石	町反	石	町反	石	石	石
水戸	一、五五・九	三、四七〇	六六四	一・一	二〇	二〇	六一・七	一、三二〇	△三
東茨城	三、一八五・九	六八、八二〇	三、〇七一	一九〇・一	二、九七〇	△一〇九	六、一〇六・三	八二、九四〇	八、八七〇
西茨城	一、一〇二・九	二三、五二〇	△二、四三四	二二・四	一、二七〇	△二四一	二、二七八・五	二七、四九〇	△二、二七三
那珂	二、八七七・〇	六六、六四〇	二、八九七	六八・一	一〇、〇四〇	一、一〇八	七、五九二・八	一三二、二八〇	一六、三八五
久慈	二、八五五・七	五八、二二〇	四、四一三	四八六・一	七、二九〇	五三四	三、一一九・〇	四五、四四〇	二、八二九
多賀	七六二・一	一七、二九〇	一、二五六	三四〇・三	五、三九〇	二八五	一、四八〇・七	二一、三五〇	四、〇七二
鹿島	二、二九八・五	四二、六四〇	六四六	四六三・四	六、七三〇	二九三	五、二八六・四	六九、〇〇〇	五、九二一
行方	八三三・三	一三、五二〇	△八五	二八七・八	三、九六〇	△一三四	一、八〇五・三	二一、六五〇	一、四一三
稻敷	一、四八一・七	三五、八六〇	一、二五四	七八・七	一、一三〇	△二八	三、三六・二	四〇、三九〇	四、五一七
新治	一、七八九・九	三八、六四〇	△一、九〇五	八五・一	一、四九〇	三一九	四、六七五・九	六一、六三〇	七、〇七一
筑波	一、八三六・一	四八、二九〇	三、二七三	二・五	四〇	八	三、〇四六・一	四四、二四〇	四、五八七
眞壁	三、八四〇・八	九八、四八〇	一、三七五	三八・一	七一〇	三一	四、八七四・二	七〇、五五〇	三、一八四
結城	三、八二〇・六	一二二、二七〇	一、五五八	一〇〇・三	六〇	一三	三、三七五・五	五〇、三八〇	二、二一八
猿島	五、三〇七・六	一五八、八四〇	一六、〇二一	〇・三	一〇	七	四、九四八・六	八〇、六〇〇	九、〇四九
北相馬	九七〇・五	二三、四二〇	一七九	〇・七	二〇	一	一、七〇八・二	二四、二四〇	一、三五〇
計	三三、一七八・五	八〇七、八〇〇	三二、一七三	二、七二四・〇	四一、六〇〇	一、九二八	五三、四八九・四	七六三、五二〇	六九、五九五

林野産物

昨年の總産額は七百八十二萬餘圓

公私有林伐材の首位は久慈郡が占め

副産物、石材、土石等何れも増産

昭和十一年に於ける本縣の林野産物總價格は七百八十二萬三千四百十九圓にして内公私有林伐採三百五十九萬一千八百二十一圓(四割五分九厘)林野副産物三百二十萬九千四圓(四割一分)石材土石百二萬二千五百九十四圓(一割三分一厘)である。而して之を郡別に觀るときは久慈郡の百五十五萬八千八百七十四圓が第一位を占め西茨城郡の百萬二百七十六圓、新治郡の九十萬一千三百九十二圓、那珂郡の七十九萬四千八百六十三圓、東茨城郡の七十一萬一千三百三圓、多賀郡の六十九萬六千二百五十四圓の順で、其の他五十万圓を超えざるものは眞壁、筑波、鹿島、稲敷、猿島、行方、結城、北相馬の順位である。更に公私有林伐採、林野産物、石材土石を各別に示して見やう、

公私有林伐採量 公私有森林の伐採面積は五千七百九十六町七反、伐採總價額三百五十九萬一千八百二十一圓にして之を前年に比すれば伐採面積に於て七百十町一反(一割二分三厘)伐採總價額に於て九十二萬百五十五圓(二割五分六厘)を何れも増加した、之を種類別に所有別伐採價額を觀るときは次の如くになる

	公有	社寺有	私有	計	總價格ニ對スル割合
用材	七、四五一圓	四、〇三九圓	一、九〇九圓	一、九二一、一七九圓	五割三分五厘
薪炭材	七、二八三	六、七一一	一、六〇三、〇〇一	一、六一六、九九五	四割五分〇厘
竹材	四〇	一三五	五三、四七二	五三、六四七	〇割一分五厘

更に此の用材、薪炭材、竹材を郡別に示せば次表の如くなる

(△印は減)

	用材 針葉樹	用材 濶葉樹	用材 計	薪炭材	竹材	價額計	前年ニ比シ増減
東茨城	七四、五二五円	七四、四六八円	一四八、九九三円	一八四、三六七円	六、六六九円	三四〇、〇二九円	七六、〇九五円
西茨城	一〇九、二八八	二六、七二一	一三六、〇〇九	九七、〇二一		二三四、三〇二	五九、八六二
那珂	二五四、四三三	二〇、〇七五	二七四、五〇八	一九六、九九二	四、一五七	四七五、六七七	五一、三二五
久慈	五〇九、二二四	二六、二五〇	五三六、四六四	三〇一、六四九	八、七一九	八四六、〇三二	三三一、六四六
多賀	二九、一七五	八、二一三	三七、三八八	九六、五四九	二、四九三	三三六、四三〇	四六、一九五
鹿島	二七、九〇八	一、七八五	二九、六九三	一〇二、一二八	二、二三五	一三四、〇五六	三三、六七七
行方	四六、四五四	二、六九二	四九、一四六	四三、四九八	二、六六六	九五、二七〇	二一、三六二
稲敷	七〇、四一六	九、〇〇七	七九、四二三	一〇二、九一三	一、二二六	一八三、五五二	二九、六四三
新治	一三八、九五三	三七、八四九	一七六、八〇二	一五三、六五三	一〇、一三五	三四〇、五九〇	一二六、四五五
筑波	九一、八五	一七、九三二	一〇九、二二七	九九、六九〇	六、六〇五	二一五、五一二	六二、〇二二
眞壁	二九、一〇一	一七、八二一	四六、九二二	一〇八、一八四	六〇一	一五五、六九七	△二、五六八
結城	一一、〇〇五	一三、八一九	二四、八二四	三九、六三八	四、一〇九	六八、六七一	一九、一三一
猿島	四五、一四七	二八、〇〇五	七三、一五二	八四、四六六	七七三	一五八、三九一	七三、〇二二
北相馬	三、九六〇	五、六九八	九、六四八	六、一九七	一、七八七	一七、六三二	二、二八〇
合計	一、六三〇、八五四	二九〇、三三五	一、九二一、一七九	一、六一六、九九五	五三、六四七	三、五九一、八二一	九二〇、一五五

林野副産物 次に林野に於ける副産物は總價額三百二十萬九千四圓にして内木炭二百二十六萬四千二百六十四圓(七割〇分六厘)柴草五十一萬二千二百三十一圓(一割六分〇厘)樹實及樹皮三十九萬二千九百二圓(一割二分二厘)筍二萬七千六十七圓(〇割〇分六厘)松茸及椎茸六千三百八十二圓(〇割〇分二厘)其の他五千九百十七圓(〇割〇分二厘)である。之を前年に比すれば總價額二十八萬四千八百二十圓(〇割八分九厘)の増加で之を細別すれば木炭は十五萬五千九百八十六圓(〇割四分九厘)柴草は二萬六百七圓(〇割〇分一厘)樹實樹皮一萬六千七百七十四圓(〇割〇分一厘)を孰れも増加した。

石材土石 林野産物の内石材土石の總價格は百二萬二千五百九十四圓にして内花崗岩六十一萬五千六百四十八圓(六割〇

分二厘）砂利三十二萬六千四百三十圓（三割一分九厘）大理石二萬七千二百五十圓（〇割二分七厘）石灰岩二萬二百六十二圓（〇割一分九厘）粘土二萬二百八圓（〇割一分九厘）其の他一萬二千七百九十六圓（〇割一分〇厘）にして前年に對比し總額に於て二十萬一千五百八十七圓（一割九分七厘）を增加した。種類別に於ては砂利十一萬二千九百五十七圓（一割一分〇厘）花崗岩八萬八千八百六十四圓（〇割八分七厘）粘土三千八十四圓（〇割〇分三厘）其の他に於て七千五百十八圓（〇割〇分七厘）を孰も增加したが大理石に於ては一萬六千五十圓（〇割一分六厘）の減少を示した。

資源概況速報

資源統制運用準備上の必要ある趣にて之が速報方に付其の筋から通牒があつたので本縣に於ても去る三月二十二日統收第一〇號にて該當事項がある場合には直に速報方通牒を發した。調査事項は

一、港灣工場幹線道路其の他の重要諸施設の注目すべき新設閉鎖變更等に付其の名稱所在地及概要の說明

二、發見（農產、水產、鑛產、工業等）但し速報を旨とし聞込の程度にても直ちに通報すること。

三、研究發明及考案に付其の題目及內容の概況並に研究發明又は考案者の氏名住所及所屬機關等。尙其の工業化せられたる場合に於ては事業者の氏名及住所事業內容の概要等

以上の速報樣式は通牒中に記載してあるから報告洩にならぬ樣注意せられたい。

躍進レールに乘じ 房總より國都に範を求めて

茨城縣統計協會縣外視察紀行

六月八日

長驅千葉の粹を求めて我茨城の完備を期さうとして本縣協會の企てた縣外優良町村事務視察第三回派遣隊出發の日だ。

晴れの門出と云ふに天は吾等に幸を惠まざりしか降りしきる霖雨を恨みつゝ水戸よりの一行に加はらうと水海道の小島氏、大寶の橫瀨氏、眞瀨の宇津野氏と共に取手に向ふ。待つ程もなく囂々たる車輪の音を響かせつゝ吾等の列車はプラツトホームに橫着けとなつた。最後部目差して進めば中央に高島團長のエビス顏が吾等を迎へて居る。早速事務分擔の變更を申出た處通牒にもある通り變更は困るとの嚴い御達し然も團長の愛嬌戰術には否み切れず且後に控える才氣縱橫の記者連を賴みに心許なくも記草の一端を果さんことを約束せざると得なくなり滿々引受けたからした苦しみも知らず吾等の汽車は目的地さしてひた走りに進み行く。柏驛で水戸よりの一行上中妻の藤地氏、笠間の成田氏、野口の西村氏、金砂の會澤氏、坂上の田村氏、安中の飯塚氏牛渡の稻生氏と初對面の挨拶をかはし前途の御面倒を乞ふ。

漸くにして談笑も彈み、總武ガソリンカーに乘る。乘心地の惡いのゝ降りしきる雨への嘆聲が聞える。時々職業意識から起る車外の農產物に對する評價の聲が耳に入る。船橋に着いてからも總武線で植付けられた憂鬱な氣分は仲々拔け切れぬらしく氣持よい省線電車に乘換へても默り勝ちだ。餘りに靜か過ぎる。皆の緊張した樣子を見ると、これが敵陣（敵としての記事の御許しを乞ふ）に乘り込む一瞬間の沈默かとも思へる。吾等は千葉縣を常に敵として戰ひ續けてゐる。『今度の視察の目的は彼の長を取り、我短を補ふにあり』と云ひたくないのだ。『彼の短を指摘しに行くのだ』と云はんばかりの負けん氣が誰もの眉宇にも表はれてゐるのを見てもそう思へて仕方がない。

さう見た筆者の眼に狂ひがあつても誰もがこの氣分であつて欲しいと願ひたい。必ずや近き將來に我が統計は千葉を遥かに見下す立場になることを獨り胸に期して縣廳入りをした。

十時四十五分、千葉驛に着くと改札口には千葉縣統計協會の丹野氏が態々出迎へて下されたのには恐縮した。正門で先着の高松の木瀧氏、八代の鬼澤氏と落合ひ一行漸く勢揃ひして縣會議員控室へと招ぜらる。視察員一行の顔振れを披露すると、

茨城縣統計協會幹事（縣屬）　高島　萬藏
東茨城郡上中妻村書記　藤地　伴介
西茨城郡笠間町書記　成田丑之助
那珂郡野口村書記　西村勝太郎
久慈郡金砂村書記　會澤　孝
多賀郡板上村書記　田村　實
鹿島郡高松村書記　木瀧德三郎
行方郡八代村書記　鬼澤長四郎
稻敷郡安中村書記　飯塚新之助
新治郡牛渡村書記　稲生　高吉
筑波郡眞瀬村書記　宇都野竹雄
眞壁郡大寶村書記　横瀨　定平
結城郡水海道町書記　小島久一郎
猿島郡神大實村書記　羽富　好
北相馬郡菅生村書記　大瀧　寅直

千葉縣安房郡主基村役場に於ける視察員一行
（前列向つて左より）田村、統計主任
高島縣屬（茨城）川名村長、萩原縣屬
（千葉）

千葉縣廳

此の室は前二回の本縣の視察團も案内された室で、先づ茶が選ばれてから間も無く今關課長が現れ一同を前にして統計の重要性を說き、茨城と千葉は地理的にも又調査方針にも相似たる点多きに依り、相共に提携して統計の改善に努められたいと述べ、本年の千葉縣統計事業の改善方針の概要を語られるに及んで我茨城健兒の負けん氣は又々發揮され『何くそ千葉縣になんか負けるものか』と云はんばかりに誰もが一齊に課長を睨んでゐる。課長の挨拶が終つて課長を始め統計課員の心から

なる中食の饗應を受け裏門前で記念撮影をし、至れり盡せりのもてなしに感謝しつゝ萩原屬の案内で本千葉に駈けつける。本千葉驛より再び房總西線電車に身を任ね模範村根形村に向ふ。楢葉驛でバスに乘り限り無く續く田園に雨にもめげず營々として耕作に田植に勵しむ農夫に感激の眼を配り乍ら車はひた向きに根形をさして進む

模範村　根形村

役場の改築とかで假舍の爲一寸見當らず、やつと役場を探し出せば、德田主任がにこ〳〵として吾等を招じて下された。統計の專用室かと思はれる氣持よい殿堂だ。四方の壁には農產物、人口、納稅成績等總べてを圖表に表示してあり、統計主任及調査員の名札がずらりと掛けてある。卓上には既に整然たる書類が山と積まれてあり、吾等は挨拶もそこ〳〵にもう書類を拜見し始めた。高島團長及千葉縣萩原屬より前以つて拜聽しては居つたものゝ聞きしに優る整備充實に只呆然とせざるを得ない。誰の口からか『日本一』だとの聲、皆等しく讃嘆する。德田主任は只調査員の努力と申さるゝものゝ主任の努力と指導の如何に大なるかを感じ知らず〳〵敬愛の情に燃え頭が下つた。德田主任の微に入り細に涉る說明を聞き乍う小票、集計表、報告表、調査原簿、各種材料、米生產統計に關する一切の書類を見る。何一つとして非の打ち處がなく、特に吾々の注目をひいたのは調査員表彰規程を設け年々優良調査員を表彰して活動を促し、調査員報告整理簿に依り、期限の勵行を期する。或は又統計改善簿を備へて常に調査員と改善協調を計る、耕地圖は縮圖一綴として携帶に至便ならしめ、調査員の會合に際しては時間勵行を確守させるために名札を造り出勤順に掛けさせる等、吾等一行にとつて得る所頗る多く吾等の常に願ふ統計の改善に對し大いなる示唆を得た。

村長遠藤正信氏は溫厚篤實の人で統計には特に熱意を持たれ德田主任と相共に之れが使命達成には一意力行なされてゐると聞く。かくしてこそ村民の理解と信望が加はり今日統計の模範村として『統計と云へば根形村、根形村と云へば統計か』と知られてゐるのもこの村長あり、主任あればこそと感銘しつゝ役場前で記念撮影をし辭去す。再び楢葉驛に引返へし三時五十七分列車の人となる。

快晴ならば車窓の眺めも素晴しいのに雨にけむつて遠望もきかず二時間餘の疲れた頭を慰し得ず期待にはづれ只雨を恨むばかり。

一しきり視察の感想談に花が咲いたが次第に耳にしなくなつたと思ふて見廻すと居眠りをして居る者もある、果して何の夢か。中には蠶が何うの、田植が何うのと留守中の家の事迄考へて

る者もあるらしい。上總湊邊りより雨も止み眼前に展けて行く景觀に胸のすく樣な感に打たれ『あゝやつとこれで心の洗濯が出來るぞ』等の聲が聞えて來た。勝山北條と汽車は進むにつれいよ〳〵展望も變化に富み、雜念も去り漸く薄らぎかけた頃はや鴨川々々の聲に夢破られて驛の外へとおし出される既に指定旅館吉田屋からは番頭が出迎へてくれハイヤーの特別サービスをしてくれた。

旅裝をとき入浴前の一時に横瀨氏、鬼澤氏等今日の視察の參考資料配布に大童だ。

六月九日

天氣が良ければ源頼朝で名高い仁右衛門島を見物する約束があつたので未だ明けやらぬに跳ね起れば今朝も亦小雨が降り續いてゐる。既に半數は起き出し砂濱を散歩する者、朝湯に浸る者、思ひ〳〵に夫々心行くばかり旅の情緒を味ふのに苦心の體、思へばあきらめきれぬ此の天氣、何うして我々に朗かな日を與へぬのだ。七時半には昨夕驛前で別れた萩原屬が見えたので一同出發の用意をし雨の中を大バスで主基村に向つた。

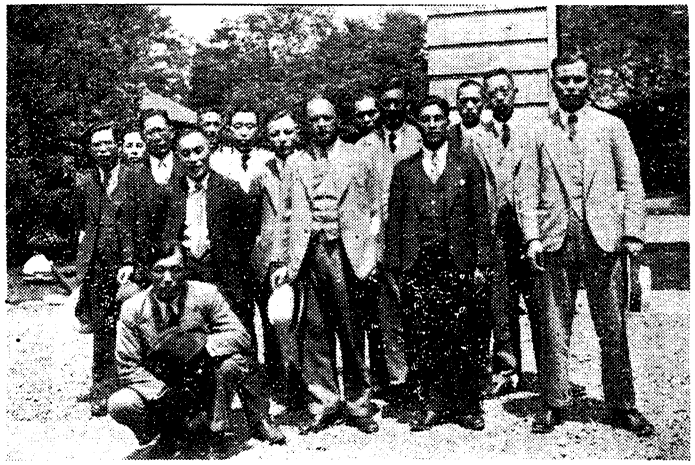
模範村 主基村

主基と云へば優良産業組合で全國に知られた所。其の村名は明治天皇御即位後明治四年十一月十七日を以て大嘗祭の御儀を宮城内吹上御苑に於て擧げさせ給ふに當り御齊田(主基田)を本村に御定めになられたのを記念する爲大正天皇御大典の際山基村を主基村と改稱した光榮の村で其の名を恥めず色々の方面から模範村になつて居るそうな。

鴨川より保田に通ずる縣道、流れに添ふて雨上りの坂道をうねり〳〵登つて行く事一里餘、堂々たる建物の前に下車すれば主基村信用販賣購買利用組合の門札、目ざす役場はさて何處、萩原屬の案内に從へば組合右側の小高い丘に立派な役場、玄關には統計主任の田村博君が出迎へ一同應接間に通される、流石統計模範村の主基村、角から角迄鏡の如く掃き清められ整然たるもの、室内には農林大臣賞の柱時計と表彰額が數枚掲げられてゐる。田村主任は一見して非常に思慮深く、しかも熱心家で勤續十一年に及び今は勸業社會學事統計を擔任し、何を尋ねてもすら〳〵と流れ出る樣な其の答、平素の努力と經驗がものを云ふのだ。山と積まれた調査書類も何一つ非の打ち所なく驚嘆の外はない。産業統計調査上最も困難な宅地、畦畔等も細密に調査がしてある。近時農家副業の奬勵に從ひ、宅地に果樹を栽培するものが多くなつた爲、宅地原簿迄も近々調製する意見等微に入り細に渉る調査振には感心する。調査員の指導方法は可成休日農閑期を利用し農繁期は避け是非ない時は夜間招集をして調査員の便宜をも考慮しながら調査の完全を期してゐる。村長川名傳氏は役場生活四十年の長きに及び温厚篤實な勤勉家、産業組合長をも兼ね、凡ゆる方面で村の爲盡瘁してゐるので統計でも産業組合でも模範村を築き擧げた事と思ふ、役場前で記念撮影をし村長や主任の方にバス迄見送られて辭した。

立正大師の聖地

それから鴨川驛に引返し小湊に向ふ雨未だ止まず、小湊に下車すれば稍恢復の兆を示し誕生寺に着いた頃は淡日さへ洩れ出た。案内される儘に誕生寺の山門を入る、壯大なる堂宇は建治二年の創建なそうで後には小湊山の老杉鬱蒼として天を蔽ふ。參詣してから此處の名所妙の浦へ行かうと門前から新しい遊覽船に乘込んだ。妙の浦は一名鯛の浦と云ふ。貞應二年二月今より凡そ七百餘年前日蓮誕生の折清泉湧き出で時でもないのに蓮華が咲き出したと云ふ蓮華潭を通つて明神島へと向ふ。約十丁で船を止めた。船頭が舷を叩きながら餌を撒けば十六人の一行は船が傾く程寄り添ふて一齊に水底を見つめる沈む餌を追ふ大鯛小鯛、右からも左からも下からも出るわ〳〵、或は躍り或は跳ね、實に壯觀無比、踊る銀鱗を見て尠からず心を好くし船から上陸すれば又降り出す。吉田屋に引上げ中食の頃には篠衝く雨と化し乘車の頃は風さへ加はる。車中勝浦の絶景を眺める頃には稍小止みとなつたが、其の後は風雨次第に加はり目につくものは車窓を叩く雨ばかり、何時しか本千葉の驛に着く。此處で案内の萩原屬の勞を謝し別れて兩國に向つた。秋葉原驛より自動車で第二夜の我等の宿たる九段の軍人會館に入つた。一同旅裝を解き入浴



◇内閣統計局玄關にて向つて右端高島屬◇

後食事を濟ませばあとの仕事は復命書の整理係の八代の鬼澤氏と大寶の横瀨氏、會計係の安中の飯塚氏と坂上の田村氏が汗だくで此の四人を除いては大東京の夜景を如何して滿喫せんと各々作戰に餘念がない。

六月十日

愈々最終の日が來た。朝起るや屋上に行き深呼吸の後護國神社に參拜して部屋に集る。一同視察に關する種々なる話が飛ぶ、何時しか朝食も忘れて座車となつて『兩村共帳簿の整理の良さ主任者の努力には驚く』と褒める者あれば『いや大した事はないよ、我々も帳簿こそ及ばぬが實地に於ては斷然負けぬよと』負け惜しみの茨城氣性を發揮する者もある、全く色とり〴〵併し僅かに七ケ年にして統計優良縣千葉の統計事務を多少でも批評する迄になつたのは非常な進歩で、此の進歩は千葉に負ふ所甚大であると一しきり話がはづんで又一人の云ふには『團長さん我々視察員の個々の意見を具申し懇談をしたいから是非座談會を縣廳で開いて戴く樣課長さんによく話して頂きたい』等の註文が出る、視察の使命の大半を果して一同は前日來の緊張も打ち忘れて朗かになる。

身仕度もそこ〳〵にして宿舍を出る護國の英靈の靜か眠にる靖國神社に參拜し農林省へと車を走らす。

農林省

玄關に刺を通ずれば出迎へられた統計課員に省内を案内され一巡して課長室に入る。度々統計講習會で顏馴染の長畑統計官から挨拶がある。其の内昨日沖繩縣への出張から歸つた統計課長が見え挨拶を兼ねての訓示があり、團長より此處にお集の方々は大体各郡の優良町村主任なのでと紹介されても一同緊張して今日はどうした事やら皆無言で、あまりに閑くなつて居る。長畑統計官より『貴縣に於ては蠶繭調査員はどんな方が任命されたかの問ひに初めて開口『私共が任命されました、第一要件として統計主任又は統計に經驗あるものと縣より通牒があつたので』と答へ漸く話が緒について來た。やがて神大實の羽富君『村内一般に統計思想の普及には如何なる方法が最も適當でせうか』と質問すれば、長畑統計官は三重縣のある村の例を引いて說明され二時間餘にして厚く禮を述べて辭し、車を内閣統計局にと走らせた。

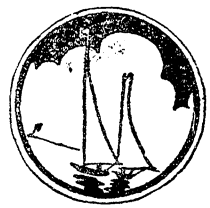
内閣統計局

内閣統計局は非常に快く喜んで迎へて呉れ、時間の不足で挨拶拔き、直に局員の案内で第一製表課に入る。人口動態小票、勞働調査、家計調査、國勢調査と各係別に主任の方から小票提出より内容調査、製表發表に至る迄それは〳〵詳しく面白く說明され時の過ぎるも知らず傾聽した。三百餘名の若い女性がソロバンをはぢいたり、計算器を操つたり、ペンを走らせたり一所懸命働いて居る。何でも着手命令書と云ふものがあつて能率をテストされるのだとの事、サボる譯にも行かず容易ぢやない、此處では女性に遠慮したのか眞寫係は一向に活躍しない。

次の室では國勢調査の申告書が美しい女性の手であまり無雜作に數字を記入されて居るので若い眞瀨の宇都野君『そんなに早く符號を付けて間違はないものかね』『いゝえ、絶對にそんな事はありせまん』宇都君しきりに感心して居る、いや感心したのは宇都野君のみでない、誰もが之は人間業かと驚かされた。之で一通りの視察も終つたので局前で最後の撮影をして解散の挨拶、其れから自由行動となつて妻子への土産の品定め、斯くて家族へも喜びを頒ち第三回の本會統計事務視察を終つたのである。

寄贈圖書

昭和十年大日本帝國港灣統計要覽　内務省土木局
昭和十年長崎縣統計書第一、四編　長崎縣
京都府統計研究會誌第二十九號　京都府統計研究會
統計界　岩手縣統計協會
宮城統計　宮城縣統計協會
昭和十年青森縣統計書第一、二、三、四編　青森縣
昭和十年香川縣統計書第一、二、三、四編　香川縣
昭和十一年蠶糸類及眞綿統計表　農林大臣官房統計課
東京府統計書　東京府
和歌山縣勢　和歌山縣
京都市勢一斑　東都市役所
三重之統計　三重縣統計協會
東京府産業統計一覽　東京府總務部調査課
東京府工産物一覽　東京府總務部調査課
昭和十年岐阜縣統計書三、五卷　岐阜縣
統計上より見たる千葉縣の地位　千葉縣總務部統計課
千葉縣市町村統計要覽　仝
昭和十一年生徒兒童身體檢査統計　仝
昭和十年千葉縣統計書第一、二、四編　千葉縣
昭和十一年度航空統計年報（第六回）　遞信省航空局
昭和十年熊本縣第五十五回統計書第一、二、四、五編　熊本縣
昭和十年福井縣統計書第一、二、三、四編　福井縣
昭和十年新潟縣勢一班　新潟縣統計課
統計時報第二卷第六號　秋田縣統計協會
兵庫統計第七十四號　兵庫縣統計協會
昭和十年沖繩縣統計書第一、二、三編　沖繩縣



統計相談所

統計に關し疑問なり又は不明な点がありましたらドシ〳〵御問合せ下さい。誌上にて叮嚀にお答へ致します

〔問〕 鶏及鶩表中飼養戸數の區別は成鳥に依り區分するや、又成鳥と雛を合したるものに依るや、例へば成鳥十羽、雛四十五羽の如き場合の取扱如何。

〔答〕 飼養戸數の區別は凡て成鳥と雛とを合したるものとす。故に設問の如き場合は五十羽以上として掲上するものとす。

〔問〕 農會より報告の耕作用牛馬の頭數と農林統計の牛馬の頭數との關係に付伺ひたし

〔答〕 農林統計の牛馬の頭數は十二月末日に現在する其の市町村内の牛馬の總頭數を調査するものであるから一頭も洩れなく全部調査するのであるが農會より報告する耕作用牛馬の頭數は右の内より耕作に使用せざるものを除くことになる。即ち牛では全然耕作用に使用せざる乳中及未だ使用し得ざる犢、馬では乘用馬、荷役にのみ使用する馬及未だ耕作用に使用し得ざる駒等は耕作用牛馬ではないから之等の牛馬がある市町村では其の數だけ農林統計の數より少くなることになるから調査に際しては充分連絡をとり不合理無き樣注意して貰ひたい。

〔問〕 養蠶の掃立數量の調査に際し實際の蟻量が蠶紙に表示したる卵量と著しく相違のものあるも斯る場合の取扱承知したし。

〔答〕 調査し得るものは凡て實際の卵量を調査せられたし。

〔問〕 米生産統計調査の補助票は糞に縣よりの意見として農林省へ提出の樣式を使用して差支なきや。

〔答〕 差支なし、次年の共同印刷の用紙は希望に依りては改むるの用意あり。

〔問〕 栗畑は畑として取扱ふべきや又山林として取扱ふべきや。

〔答〕 果樹園としての手入を爲すものは畑とし手入を爲さざるものは山林とす。又樹實は未だ區別調査を爲さざるに付凡て林野産物の内へ合算せられたし。

〔問〕 農作物收穫用物干場たる宅地の一部に夏期に於てのみトマト等を作付する場合あり、斯の如きは其の面積を畑として作付反別調査原簿に記入すべきや。

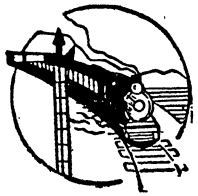
〔答〕 本來の目的が畑とならざるを以て畑の作付反別調査原簿に登載を要せず宅地内の見積反別として作付反別調査票に記入すべし。

〔問〕 ビール麥は何麥として取扱ふべきや。

〔答〕 大麥として取扱ふべし。

〔問〕 人口動態票進達の際一票提出洩となり之を翌月に至り發見し、翌月の分と共に出票する場合同票欄外の年月の記入は如何に取扱ふべきや。

〔答〕 市町村送附目錄の括弧内に記載の年月分として各票の番號が同目錄に記載さるゝものなれば出票洩のものも凡て同月分として取扱ふべきものとす。



各地統計雜信

調査員諸君何なりと賜つて御通信を願ひます

賀美村統計事務奬勵規程

統計調査の國家的、社會的に重要性をもつに至つたのに鑑み益々刷新改善を要すべき秋に際し之が基礎的調査の重責にある統計調査員の精神的優遇を圖り一方時間の觀念と報告期限の勵行を促し社會の期待に副ふべき的確な調査を奬勵する爲從來三年乃至五年に行つた表彰を別項の如く毎年度成績上位の者より二人宛表彰することに改め之が授與式は村各團体主催の品評會褒賞授與式擧行の際に併行し、ひいて村民に對する統計思想普及を圖ることゝした。

統計事務奬勵規程左の通定め昭和十二年度より之を施行す。

賀美村統計事務奬勵ノ爲左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ之ヲ表彰ス

一、統計調査員ニシテ職務ニ精勵シ成績優良ナル者

二、統計ニ關スル特殊ノ施設又ハ考案ヲナシ裨益アリト認ムル者

三、其ノ他統計ノ改善ニ盡力シ其ノ功績顯著ナル者

第二條 統計調査員ニ對スル表彰ハ其ノ年度内ニ於ケル成績ニ依リ之ヲ行フ

統計調査事務成績調

調査區名	調査員會出席數		報告期限		報告書ノ記載不備件數	全上違算數	實地調査日割報告ノ恪守	小票調査ノ正否	其ノ他
	會日數	時間前參會數	期限前到着	期限後全上					

第三條 表彰ハ毎年三月之ヲ行ヒ表彰狀及記念品ヲ授與ス但シ場合ニ依リ表彰狀ノミヲ授與スルコトアルベシ

表彰狀

統計調査員 氏 名

昭和何年度ノ統計事務成績優良ナリ仍テ表彰ス

昭和 年 月 日

久慈郡賀美村長 氏 名

表彰狀

統計調査員 氏 名

右者克ク職務ニ盡瘁シ優良ナル成績ヲ擧ゲ各年度ニ於ケル表彰ヲ受クルコト何回其ノ功績洵ニ顯著ナリ仍テ之ヲ表彰ス

昭和 年 月 日

久慈郡賀美村長 氏 名

（村長ニ於テ常ニ之ヲ調査ス）

優良統計調査員表彰

眞壁郡統計事務研究會下館支會に於ては調査員優遇の目的を以て去る四月十日調査員にして成績優秀なる者に對し支會內町村一名宛支會より表彰狀並に記念品を贈呈し表彰を行ひ又調査員にして四ケ年以上勤續し退職せる者に感謝狀を贈呈した。

表彰狀贈呈者

下館町小島誠一郎、竹島村大山喜一郎、養蠶村長須正一、河間村渡邊高一、中村上河原喜與藩、五所村添野正平、伊讃村山中國助、大田村川田好郎、嘉田生崎村齋藤貞次村田村松本彌一郎、古里村小島義三郎、新治村日向一郎、小栗村海老原信一

△感謝狀贈呈者

竹島村小島正壽、中村石崎覺一、新山栄、古里村大島清五郎、日向卯三郎、新治村中島正一

渡里村調査員會

東茨城郡渡里村では五月二十日仝村役場に於て統計調査員會を開催、縣より郡擔任の小泉屬が出席した、午前八時三十分開會、綿引助役の開辭に續いて小泉屬より主として春季調査に就ての說明ありたる後、各自持參せる調査小票等の互審會を行ひ以て調査の完璧を期して散會した。出席者左の如し。

△役場　綿引助役、須能書記

△調査員　安藤清、須能新、雨谷胤弘、鈴木丈夫、大津孝二郎、小國江卯之吉、大槻勇五郎、根本貞三郎、根本正造

西郷村調査員會

東茨城郡西郷村では五月七日仝村役場に於て統計調査員會を開催、縣より郡擔任の小泉屬が出席した、午後一時三十分開會、鯉淵村長の開會辭に續て小泉屬より統計調査員會議要項により說明ありたる後、第七調査區の一部を實施調査を施行し以て調査の完璧を期し午後五時散會した。出席者左の如し

△役場　鯉淵村長、綿引助役、關谷書記

△調査員　綿引淺太郎、加倉井房吉、久保田精一、長谷川角之介、大津芝四郎、小瀧正翁、江幡三八吉、軍司一之、所誠之介、綿引幹男、出澤勢太郎、加藤仁衛門、加藤和夫、大坪貞一

那珂郡西部統計事務研究會

那珂郡西部統計事務研究會は六月二十六日薩郷村役場樓上に於て開催、縣より吉見屬が出席した。午前十時開會、高澤薩郷村助役の開辭に次ぎ吉見屬より簡單なる挨拶の後、直に縣の提案事項に就き說明、夫々質疑應答を重ね次いで部會提出事項の左記事項に就て協議を重ね午後二時閉會した。

一、綠肥增作物ニ關スル件

二、鷄ニ就テ

三、各季調査集計表記入ニ關スル件

尙出席者は左の通りである。

寺門書記(靜)三村書記(大場)萩谷書記(上野)藤田書記(大宮)大森書記(大賀)長書記(玉川)岡崎書記(鹽田)根本書記(山方)岡崎書記(檜澤)橋本書記(小瀨)西村書記(野口)古田土書記(長倉)田澤書記(八里)飯田書記(薩郷)高澤薩郷村助役

久慈郡中部統計事務研究會

六月二十五、二十六兩日久慈郡中部統計事務研究會を高倉村役場に開催した縣統計課より同郡擔任の高島屬出席し午前十時半細谷高倉村助役の開會の挨拶あり、續いて高島屬の挨拶並に縣提出議案に依り詳細說明ありたる後質疑應答をなし散會した。出席者左の如し

細谷助役(高倉)鶴田書記(中里)助川書記(賀美)小田部書記(小里)鈴木書記(染和田)根本書記(天下野)吉成書記(高倉)會澤書記(金砂)荒井書記(金郷)大森書記(世喜)

筑波郡中部統計研究會

五月二十六日仝郡小野川村役場に於て統計事務研究會を開催、縣統計課より池田屬、松井主事補が臨席した。午前十時小野川村長の開會の辭に次で池田屬、松井主事補より報告期限の勵行、各季統計調査實施に當り細則に基き調査の完璧を期すべきこと、統計報告書類の取扱方、並に六月より九月末日に至る諸報告表に就き製表上の注意あり質疑應答を爲し午後一時三十分閉會せり出席者は左の通である。

直井書記(谷田部町)濱野書記(福岡村)鯉淵助役(島名村)宇津野書記(眞瀨村)佐々木書記(旭村)石濱書記(上郷村)中島書記(葛城村)成島書記(小野川村)

結城郡第四部統計事務研究書

結城郡第四部統計事務研究會は六月十五日水海道町役場に於て開催縣より阿久津屬出席した。午前十時十五分開會議案に基き詳細說明の傍質疑應答を重ね最後に水海町書記小島久一郎氏の縣外優良町村視察に關する參考事項の開陳あり午後一時半終了した。尙當日出席者は左の通りである。

水海道町書記小島久一郎、菅原村書記大根宗次郎、三妻村書記谷澤源衛、五箇村書記星野武、大生村書記廣瀨貞治、大花羽村助役石塚耕作、豊岡村書記中島良平

西茨城郡統計事務研究會

七月七日同郡統計事務研究會では北川根村役場に於て定例研究會を開き縣統計課より部統計主事補が臨席した午前十時開會上野同村長より挨拶あり次いで縣提出事項に就き部統計主事補より詳細說明の上質疑應答を重ね後笠間町成田書記より千葉縣視察の概況報告あつて閉會した、出席者左の如し

(笠間町)成田書記　(宍戸町)友部助役
(岩間町)宇都野書記　(北川根村)野口書記
(大原村)石井書記　(大池田村)川松書記
(七會村)仲田書記　(北山內村)宮本書記
(南山內村)笹島書記　(西山內村)羽方書記
(東那珂村)宮崎書記　(北那珂村)輕部書記
(岩瀨町)倉品書記

本縣總務部長更迭

本縣總務部長山本秋廣氏は今回の地方官異動に伴ひ七月一日付を以て退官せられ後任には警視廳官房主事今松治郎氏が七月八日付を以て發令された從つて本統計協會長も會則の示す所に依り今松新部長が會長となることゝなつたので山本前會長には記念品を贈呈して其の勞に酬ゆることゝした

鐵鋼調査に關する調査

現在鐵鋼需要の現狀に鑑み政府に於ては鐵鋼需給及價格の調整を圖る爲鐵鋼關稅の暫定的撤廢其他各種の措置を講ぜられつゝあるのであるが今般鐵鋼の生產販賣等に關する狀況調査の爲資源調査法に基き鐵鋼調査に關する規程が商工省令第三號を以て四月十六日公布せられましたから貴市町村內に關係當業者がありましたなら統計課宛御報告を願ひます。

一、鐵鋼調査票提出者の種類は

（イ）商工省告示第三四號にて指定せる鐵鋼の製造業者

（ロ）同上販賣業者（輸移出入業者を含む）但（ロ）の販賣業者は商工省令第三號第一項但書に依り販賣數量月額三十瓲（一日一瓲約二百六十七貫）程度以上の販賣力あるもの又は月末在庫數量十瓲を有するものに報告の義務があります。

二、前項製造業者、販賣業者輸移出入業者中には鑄物業者鐵工所機械製作所其他鐵鋼加工業者又は鐵鋼加工製品の販賣業者等にして鐵鋼材を地金の儘販賣せざるもの及古鐵販賣業者を含みません。

昭和十二年商工省令第三號第三項の規定に依る鐵鋼の種類は左の通指定されました

銑鐵、鋼片、シートバー、棒鋼（鋼丸鋼角鋼及平鋼形鋼（山形鋼、丁形鋼、溝形鋼、工形鋼及乙形鋼）軌條及繼目板、線材、鋼管（各種繼目無鋼管鍛接鋼管及熔接鋼管）帶鋼、金屬を鍍せざる鋼板（但し美裝鋼板及珪素鋼板を除く）厚板（厚六粍以上）中板（厚一粍以上六粍未滿）薄板（厚一粍未滿但しブリキの原板を除く）ブリキ

統計主任者異動（上は新任括孤內は舊）

昭和十二年五月十八日　久慈郡郡戸村　藤田義明（鴨志田慶三郎）

全　四月廿八日　結城郡山川村　五十幡隆（高島庄一郎）

全　五月二十七日　多賀郡日立町　戸祭正（大內健司）

全　六月十一日　多賀郡松岡町　細金洸（樋口五郎）

統計調査員異動（上は新任括孤內は舊）

昭和十二年四月三十日　眞壁郡古里村　仮泉宗吾（日向卯三郎）

大木文雄（坂橋芳郎）

全　四月十七日　眞壁郡上妻村　北島德三郎（北島春吉）

須藤長兵衛（門井丑造）

柴森仁太郎（野口政次郎）

吉川清次郎（塚田長重郎）

全　五月十日　東茨城郡上中妻村　大貫敬三郎（大貫隆正）

柳林新太郎（柳林健太郎）

雨谷政夫（雨谷熊夫）

立原藤一（立原鶴松）

全　五月八日　稻敷郡馴柴村　飯野富吉（飯野牛藏）

櫻井伊兵衛（櫻井庄三郎）

全　五月十二日　猿島郡勝鹿村　山本藤吉（大井浦次）

丸山龜之助（丸山四郎治）

全　五月五日　筑波郡島名村　齊藤彌市（鯉淵五郎右衛門）

室町正（增員）

全　五月七日　新治郡小幡村　廣瀨恒一郎（比企林造）

全　五月十六日　久慈郡金砂村　會澤一（鈴木音之介）

會澤元眞（菊池甲子雄）

全　五月二十二日　新治郡七會村　久保田謙壽（久保田章一）

全　五月十七日　新治郡土浦町　青木淳之（若松酉之助）

全　五月四日　結城郡宗道村　飯塚靜夫（大木政造）

全　四月二十八日　結城郡山川村　菊池靜一（森福之進）

坂本清吉（坂本藤次郎）

阿久井善一郎（朝倉宗助）

久保野谷正吉（小林清平）

長谷川善四郎（塚越鶴治）

黑田明光（沼田寧）

宮川力定（增員）

全　五月五日　結城郡絹川村　宮田善一（瀨戸井富二）

全　五月十五日　結城郡岡豐村　石塚時藏（石塚捨吉）

全　五月二十一日　行方郡手賀村　磯山善吉（高塚茂十）

全　五月二十一日　猿島郡神大實村　倉持賢一郎（海老原光一郎）

石塚重雄（渡邊練作）

伊藤兵一（金井清一郎）

全　五月二十日　久慈郡佐竹村　寺山銳三郎（白土爲吉）

全　五月二十一日　猿島郡境町　羽部德太郎（金子文吉）

戸張陸造（增田甚八）

全　五月二十一日　猿島郡櫻井村　關彌平（宇都木順二）

全　五月二十二日　鹿島郡沼前村　中山義繼（藤枝誠三）

全　五月十九日　那珂郡山方村　木村昌（木村淺之介）

清水一郎（清水清之介）

全　五月十七日　猿等郡靜村　金久保喜一（金久保民藏）

金久保弘（櫻井幸七）

全　五月五日　那珂郡木崎村　生田目順三（井坂清幹）

小林精一（江幡實）

全　五月四日　全那珂郡川田村　（市毛五郎次）寺沼武雄

全　五月二十日　那珂郡神崎村　澤畑義一（澤畑與次右衛門）

全　五月二十二日　西茨城郡西山內村　中根賢吉（中根覺）

全　五月二十二日　眞壁郡長讃村　小見清一（小見嘉平）

市村安平（寺內忠一）

渡邊久一郎（渡邊元一）

沼口道（沼口高）

沼口信四郎（沼口衛）

高濱唯四郎（武井政四郎）
五月二十五日　新治郡小幡村
高橋理一郎（高橋秀夫）
全　五月二十五日　新治郡石岡町
小松謙太郎（小松淺次郎）
全　五月二十八日　新治郡園部村
眞家本之助（眞家重治）
久保田庫之助（須藤善市）
永井義一（金子淺次）
大和田七五三（齊藤正之助）
全　五月二十日　多賀郡華川村
滑川伊市郎（丹野正美）
小野幸一（小野蕙）
山縣虎雄（山縣一）
全　五月二十七日　行方郡秋津村
鈴木金之亟（鬼澤義長）
宇津木通（關口退助）
郡司利一（郡司耕一郎）
全　五月二十五日　東茨城郡磯濱町
海野倉造（櫻井與右衛門）
岸和田正壽（小竹森信重）
石崎清太郎（小野崎松之助）
全　五月二十五日　行方郡武田村
平野毅夫（高柳庄次郎）
全　五月二十四日　稲敷郡江戸崎町
栗山憲一（松本彦治郎）
石川彦之亟（田所新之助）
桑島正二（佐藤清之助）
清原倉之助（宮本庄之助）
全　五月二十九日　猿島郡生子菅村
中村剛一郎（古宮彌助）
野口房藏（坂垣義幹）
全　六月八日　猿島郡幸島村
關源平（鈴木光）
森彌平（武井潤）
全　六月九日　行方郡大生原村
小澤長右衛門（村山文作）
土川茂衛門（飯島仙太郎）
小堀嘉右衛門（箕輪甚之助）
藤崎市彌（大川仁助）
全　六月五日　久慈郡響田村
榊誠作（江幡秀太郎）
全　六月七日　眞壁郡長讃村
横田定雄（沼口通）
全　五月二十五日　那珂郡村松村
塙豊之介（塙利雄）
田口市太郎（宮本長三）
川亦熊太郎（增員）
澤畠一男（川崎建治）
橋本清（橋本酉之介）
河野正（塙武雄）
塙卯之太郎（佐藤捨長）
全　六月十四日　稲敷郡十余島村
坂本梅治（【仙英）
全　六月十四日　東茨城郡川根村
小松崎顯美（小松崎蕙）
萩谷鐵男（萩谷操）
全　五月三十一日　東茨城郡白河村
鬼澤安太郎（中村庄七）
郡司啓司（郡司雲雄）
小野英雄（海東盛）
全　六月十一日　多賀郡松岡町
柴田武（柴田留夫）
全　六月二日　稲敷郡木原村
大野一郎（青野茂平）
全　六月四日　新治郡牛渡村
島田源太郎（島田卯之助）
全　六月十八日　新治郡上大津村
平塚芳松（神立安次郎）
全　六月十日　新治郡志筑村
森ヶ崎弁（森ヶ崎包男）
全　六月十八日　西茨城郡北那珂村
大和田主馬（大和田康藏）
仁平好文（中原宇内）

短歌

丹四郎選

『初夏雜詠』『梅雨』

（賞）　稲敷郡太田村　五十嵐康登

今朝もまたつゆかびくさきぬれ簑を身につけにつつ田植にいづる

北相馬郡菅生村　鈴木景明

木の間より影見えそむる夕月の涼しき程に夏は來にけり

猿島郡幸島村　齊藤綱壽

明日もまた降りつぐ雨と思ひつゝ今宵蓑笠の手入しにけり

梅雨の空明日は晴れむか夕土間に麥刈る鎌を研ぎ居たりけり

北相馬郡東文間村　宵雪迂人

梅雨晴れのみどり清しき反射かへし初蟬のこゑ漸く聞ゆ

新治郡志士庫村　山口義道

空青く若葉の末に雲ありてひと際強く光り居るなり

稲敷郡生板村　大野芳雄

江川邊の水汲む橋もひたされてたほふりつづく五月雨の空

那珂郡玉川村　寺門行

むし暑き麥のいきれに堪えにつつ甘藷の苗は植ゑつけにけり

結城郡西豊田村　神谷草二

白々と卯の花咲きて背戸庭の明るき晝の雨に濡れをり

結城郡西豊田村　古橋梅吉

所々青きは小麥畑にかも麥の秋來ぬこゝ下總野

行方郡武田村　境勇

あすもまた梅雨のつづくやたそがれの茂る木の葉に雨蛙鳴く

眞壁郡五所村　谷貝竹水

朝つゆにしとどに濡れて少女子は川べの草を刈り居たりけり

行方郡延方村　黑須惠三郎

皐月野の日は暮れはてて幾日ぶりに昇りし月か見つゝ清しき

稲敷郡蓮崎村　關口タケヲ

梅雨空のくもりは深し夕小田に蛙一しきり鳴き勢ふなり

那珂郡前渡村　川又浩

糸たるゝ水の面に降れる五月雨にうきの動きの明かならず

稲敷郡源清田村　杉山榮助

ふりつづく雨にぬれつゝつばくらは子の餌を求めて飛びゆくあはれ

水戸市袴塚　大高靜香

長き雨あけし心も晴々と窓に倚りつゝ朝日を仰ぐ

次回『晩夏雜詠』『水』

推薦歌

河原べの青葦むらの朝風をすがしみにつゝ出でて來にけり　沼尻蛙村

田作りもすでに久しと思ひつつひとり田打ちにいそしむ我は

うからとはげみきほひて刈りしかば今日の麥刈りの捗りにけり

梅雨雲はひくく垂りこめひむかしの筑波の山をなかばつゝめる

梅雨となる空のけはひや葭切のこもる葦むらそよりともせぬ

行々子川洲の葦にこもり鳴く朝をしづけくそそぐ梅雨かも

はちす葉の卷葉ぬき立つ水錆沼に昨日も今日も梅雨の雨ふる

枝たれて窓をおほへる椽の葉の梅雨の雫はしたゝりにけり

梅雨じめる家内いぶせみ窓あけて昼の茶漬をうからからと食ふ

俳句

前田猶春選

題『蟬』『箱庭』

○ 北相馬郡東文間村 古琅庵 宵雪

箱庭の野草も花をつけにけり

○ 鹿島郡豊郷村 思水生

箱庭の宵の風情や豆電氣

○ 行方郡武田村 境 谿水

かん〳〵と照る日の森や蟬時雨

○ 水戸市袴塚 大高靜香

松の風蟬をきゝつゝ眠りけり

○ 鹿島郡波崎町 石川武治

箱庭に趣向をこらす寮の人

○ 行方郡延方村 黒須惠三郎

蟬なくや朝雨あがる楢林

○ 稲敷郡太田村 五十嵐康登

塵ふかく茄子の葉うらの蟬のから

○ 東茨城郡石崎村 櫻井星光

箱庭に今朝も出て草をとりにけり

○ 行方郡大和村 内田六統生

蟬の尿木の間洩る陽に光りけり

○ 同 人

山莊に蟬の來て鳴く柱かな

○ 稲敷郡君原村 小松澤霞翠

雷遠く去りて蟬なく木立かな

○ 同 同 人

箱庭に小さき影もつ石燈籠

○ 新治郡土浦町 内田櫻川子

箱庭の池あふれゐる豪雨かな

○ 同 同 人

アンテナに殘る薄陽や蟬涼し

○ 同 同 人

搗きかけてある澁臼に蟬暑し

秀逸

（賞） 新治郡瓦會村 增子よし女

箱庭に届く灯影を親しめり

○ 同

箱庭の松にかゝりて糸の屑

次號課題

題『花火』『虫』通じて十句迄

締切 九月五日

宛名 茨城縣廳内統計協會文藝係

柳川

山中緋郎選

行方郡延方村 黒須一雅

別莊地ビール飲んでゝ海が見え

行方郡武田村 境 谿水

波音の絶間〳〵の詩吟なり

鹿島郡豊郷村 石津思水子

汐浴びは母へ感謝の土産物

水戸市袴塚 大高靜香

泳げない母はなぎさをたゞ歩き

新治郡志士庫村 山口義道

海へ行く計畫だけでつひ終り

北相馬郡東文間村 宵雪迂人

海水着一際目立つ肉体美

稲敷郡蓮崎村 關口タケヲ

戀人を海へ誘つて恐がらせ

新治郡土浦町 内田櫻川子

海岸に何か囁やく二人なり

那珂郡前渡村 川又浩

海鳴りへ不安が續く漁村の灯

西茨城郡福原 森緑山

日歸りの心に殘る海の色

眞壁郡五所村 谷貝竹水

夏だけの儲けをみてる間貸なり

今回入賞句なし

次號課題『旅』

締切 八月二十日

宛名 茨城縣廳内統計協會

編輯後記

×

今月號初めて商工省統計官川澄巳知雄氏より玉稿を送らる。蓋し商工統計に關する嚆矢のものである。又統計學社名譽社長横山雅男氏が本邦統計界の鼻祖杉亨二博士の事蹟を執筆せらる。共に得難く味讀すべき雄篇といふべきである。

×

時恰も農繁期に際し春季調査から夏季調査と引續いた調査員各位の御心勞は同情に堪へない。併し各位の努力が報いられて名實共に茨城統計が認められてゆく姿を見る愉快さこそは暑さを吹つ飛ばすに充分なものであらう。

×

各郡統計主任の縣外視察は大いに得るところがあつたらう。其の收穫は寧ろ筆紙に盡るものではあるまい。体得したところによつて今後の指導に當れば實際に即して改善稗益するところが尠くないと信ずる。

×

盛夏酷暑の候、各自の御自愛御攝養を祈り秋の活動に備へられん事を望んで擱筆する。

—加藤敬愛—

昭和十二年七月十三日印刷
昭和十二年七月十五日發行
（隔月一回十五日發行）
一部金十錢
水戸市北三ノ丸茨城縣廳
茨城縣統計協會內
發行兼編輯人　川崎末吉
水戸市南三ノ丸一〇七ノ二
印刷人　柴博
水戸市南三ノ丸一〇七ノ二
印刷所　柴印刷所
水戸市北三ノ丸　茨城縣廳內
發行所　茨城縣統計協會

茨城統計と廣告の効果

『茨城統計』は縣下三百七十九ケ市町村及び各市町村の統計調査員約四千名は勿論縣下各種團体、會社、工場等に配付し、中央各省、道府縣へも漏れなく配付するものにて廣告の効果偉大なるものがあると信じます。

◆本誌の廣告料金は左の通りです

特別〈一頁（表紙表裏）金拾五圓
　　〈半頁（同　）金八圓
普通〈一頁　金四圓
　　〈半頁　金貳圓
　　〈四分ノ一

▼同一廣告を引續き二回以上のときは一割五分、五回以上のときは二割の割引をします。

▼廣告に寫眞挿入又は木版を要するものは其の費用を別に申受けます

▼廣告料は前納に願ひます。

茨城縣廳內
茨城縣統計協會